

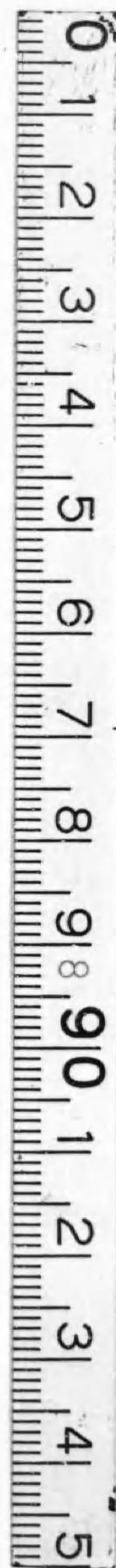
居候堂歌集

特214

330

119

709



始



特214
709



居候堂歌集



我が一門には敷島の道に堪能なる人々少からざりしが、己れ性得文事を嗜まず、武藝を好みて柔術道場を造り、拾六歳の頃より、多くの子弟を養ひつゝ、吾が道に引き入れたるき。さはれ、幼時母の膝下に侍し、口授せられし小倉百人一首を暗記し、事につけ折に觸れ、歌様のものを咏み出て、自ら慰む所ありたるぞ不思議なる。是れ所謂門前の小僧經を讀み、勸學院の雀蒙求を囀るの類ひならんか。此に其歌積つて幾何なるを知らず、多くは時經て忘れ果てつ思ひ浮ぶる由もなきを、今記憶に存ずるものゝみを書き留め、又たつぎに讀める歌をも書き誌して今昔の思ひ出にせんとす。

大正十一年十二月

居候堂主人誌す

我れ曩に青年の頃より作り棄てたりし歌謠を拾ひ上げ、居候堂歌集と名づけ置きしが、此度其の後に詠み出でたりしものをも一纏めとなし、活字に附するに至りたるは、事に觸れ物に感じて詠み出でたる當時の心境を呼び起す種にもと、日記の代用に備へたるに過ぎず。されば、和歌、狂歌、唱歌、俗謠など次々と列ね、作の巧拙など全く以て度外に置けり。若し此の集を精選して十の八九も削り棄てなば、或は歌らしきものを残すを得んも、そは我が備忘の目的に適はず、玉石混淆と云はんよりは、寧ろ泥中に玉を求むるが如しとや謂はん。世の笑草となりなんは固より覺悟のことなりかし。

昭和五年五月十五日

居候堂主人 内田良平再誌

居候堂歌集

内田良平

和歌の部

拾五六歳の頃辛島並樹先生の門に在りし時課題に應じて詠みたりしものゝ記憶に存せる歌二首

元旦

さし昇る朝日の影の長閑けきは榮えゆく世のしるしなりけり

早梅

風寒み池の氷もとけぬ間に綻びにけり梅の初花

明治二十六年東京牛込の筑前學生寄宿舎に居りし時末永節君が汽船和歌の浦丸の船員になると別れに來にければ詠みて示せる歌

荒波を踏み破りてぞ君は見む田子の浦和の富士の面影

廿七年六月東學黨軍に投じ朝鮮内地を跋涉せる時

太刀枕うち臥す空に月冴えて荒野の虎も叫ぶなりけり

征清軍平壤を陥れ北進すると聞きて

軍人嘶く駒に鞭うちてありなれ川を早や渡すらむ

廿八年浦鹽斯德に渡航せんとする時新月を見て所懐を關屋斧太郎君に寄す

荒鷺もなにか恐れん大丈夫が眺むる空に弓張の月

關屋君の返しに

驚つかむ腕こまぬいて月見哉

廿八年浦鹽斯德より故里の友に送る

露深き野邊の八千草かさわけて大和櫻を植えんとぞ思ふ

廿八年末浦鹽より芝罘旅順に渡航し廿九年一月一旦歸國して又

た浦鹽に赴き友人へ送れる

大丈夫が盟ひしことは柄の間も忘れ刀にかけぬ日はなし

浦鹽にて述懐

武夫が、取り傳へたる梓弓、引きて歸らぬ旅の空、早やも幾日か西比利亞の、荒野の末に草枕、露けき袖をかたしきて、夢路たどれる身の憂さは、誰にか告げむ時鳥、血を吐く心さゆる夜の、月に寄せてや鳴き渡るべき

反歌

梓弓引けば返さぬ武夫の矢竹心のなどつらぬかぬ

浦鹽より米國に在る友人に寄す

逢ふことの亞米利加遠く旅衣露けき野邊に我もあるかな

祖母君身まかられ叔父君より『北堂の前に植てし白菊も秋の哀れを添てけるかな』との歌寄せられければ返しに

亡き人の愛でし白菊偲ばれて露けき袖を今日もしぼりぬ

眞田信太郎君は土佐の人なり。浦鹽斯德に來りて刻苦勵勵露語を學び大に爲す所あらんとせしに、不幸にして病を得不歸の客となりぬ。哀悼の情に堪えず通夜しける時に詠める

玉の緒と共に短き冬の日をかこつ恨の夜こそ長けれ

楠本正徹君は肥前平戸の人なり。浦鹽斯德に於て予と相知りぬ。後幾何ならずして君は郷里に歸り、予復た支那に赴き尋いで日本に歸れり。居ること幾旬、再び西比利亞に渡航せんとせしに正徹君之を聞きて行を共にせんことを乞ふ。即ち伴ふて囑するに露清韓三國々境調査の事を以てす。君大に喜び、他日の争地は正に此に在るべしとて、二十九年十月初旬バセツトに赴き、彈春を経て間島に到り、普く探查して十二月下旬浦鹽斯德に歸りぬ。予大に其の勞をねぎらひ紀行を書せしむ。末だ稿を終へず三十年一月凍傷に罹り遂に歿しぬ。遺憾限りなし。諸友を集め遺骨を收めて郷里に送る時詠みける歌

君と今かくて別れて亡き骸を送るべしとは思はざりしに

鎌田祐吉君のニコライスクに行くを送りて

げにやかく昔の人は歌ひにき別れとなれば残る言の葉

得 郷 信

花咲かば告げんと言ひし古里の今日のたよりは嬉しかりけり

三十年八月十七日浦鹽斯德を出立して露都に向ふ途中烏蘇里河を下りて

船行きて心止まれり岸野邊の廣き眺に身を忘れつゝ

九月十日黒龍江の終點にしてシウカ河とアルグーニ河と會合せる地角にあるボクロフカ村にて詠める

顧みる支那の北野は人もなし誰れ守らん此の國を是れ

船に同乗せる中野二郎君に示す

思ひきや幾千里來てアムールの深き色添ふ紅葉見むとは

君と我が赤き心に照りはゆる紅葉の色は人知るらめや

九月廿七日の夕暮ネルチンスク市外を散歩して所見を詠す

いなむ子を駒にうち乗せ急がする西比利亞の牧の秋の夕暮

六

十月二日バヤンダルギンスカヤの村はづれの山麓に於て六人連れの暴行者に遇ひ奮闘して之れを倒しけるが行く手を急ぐ途中にて詠める

降りかゝる時雨の山をうち越へて晴れ行く空に三かの月影

十月六日チタ市にて大雪の降りければ

身の上にかゝることゝは白雪の降りしく空を眺めける哉

故郷に今や咲くらん白菊の花と見るまで雪は降りつゝ

十月九日夜もすがら馳せて天明の頃ボベレチンスク村に近づきて

人里は近くなりけんほの暗き木の間を洩るゝ鶏の聲

十月十日グリヤツカヤ村に着し宿かす家のなかりければ

うち拂ふ袖なし衣雪積みて西比利亞の原に日は暮れんとす

宿かさぬ人を恨みの雪深き旅路に今日もかきくらしつゝ

十月十三日クルビンスカヤ村に着し

樂も此の中にあるわびしさは旅に疲れの夕なりけり

イルクーツク市に滞在中母人の我が身の上を思ひ煩ひ給ひて夜もすがら眠につき給はぬ夢を見ければ

親まさば遠く遊ばぬ御教も身にしみ渡る寢覺めなりけり

露人予を見て朝鮮人支那人ブリヤーツ人などゝさまざまに評しあへりければ

我こそは露のけぬべき朝日子の日の本人とあはれ知らずや

三十一年三月廿七日モスコフ府にて雪の解け初むるを見てベテルブルグ府に在る島川毅三郎君に寄す

西比利亞の雪消は近し友よいざ移し植えばや大和撫子

三月三十一日烏拉爾山を越へチエリヤービンスクよりベテルブルグ府に在る廣瀬武夫君に送る

七

屏風なす烏拉爾の山を打ち越えて距たる友を忍ぶ旅哉

四月十日天氣麗かに西比利亞も春の心地しければ

春をまつ木蔭の雪は消えねども空長閑なる日とはなりけり

四月廿日イルクーツクにて菅生傳三郎君と會し別れに臨み

急がずば君と行かまし西比利亞の千種の花をかざしにはして

四月廿二日ホロウキンチャ村にて亡祖母と語りし夢を見て

亡き人とおもほえぬかな夢に見し面影在す心地のみして

五月廿九日ネルチンスクより小舟にて下りける時、つゝじあやめの花幾百里となく兩岸に咲き續きたるに、同月七日より十一日迄降りたりし雪の尙ほ谷間くに残り居り、月さへ空に出で餘りに珍らしき景色なりければ

之はしも如何なる神のわざならむ月雪花をとものにこそ見れ

七月郷里福岡に歸り九月上京の途中京都に立ちよりしに雨の降りければ

旅枕時雨るゝ夜半の淋しさは都も鄙も變らざりけり

伊吹山懷古

十萬の軍破れて伊吹山しばし忍ばむ燃ゆる思ひを

關ヶ原を過ぎて

關ヶ原靡く薄の今も尙ほ昔を偲ぶ影となりけり

友人の支那に行くを送りて

秋風の身にしむ頃を益良雄が劔さげはぎ行くはいづこそ

友人の米國に行くを送りて

高殿の雲つくいらか立ち並ぶちまたにあげよ君が譽れは

歸り來む時ぞ知らるゝ紅葉の錦織りなす今日の門出に

山田圓君が露清學校に行くを送りて

山田守る案山子となりて朽もせば取り佩く太刀を如何にせん君

三十二年二月十六日夜來雪烈しく降り夜に入りても止まざりけ

れば

花と見る人もあらしの音絶えて雪に聲あり庭の吳竹

靖國神社を過ぎりて先烈の偉勳を思ひ轉た己れの爲す所なかる
可からざるを感じ

魁けは梅に譲れど櫻花さきて散りなん時なからしや

麴町區元園町の下宿屋に大勢の友人と同宿せしがつき／＼に他
へ出で行きければ

一人去り二人は行きて燈火の影少なくもなりにける哉

櫻田門外を過ぎりて

櫻田の名に負ふ跡に來て見れば色も匂ひも夢にぞありける

述懐

山を抜く力はあれど世の人の望み負はんは難くぞありける

六月再度上京する時三日計りと云ひて故郷を出でしに歸りの後れ

ければ

歸らむと思ふ心は深緑繁きこのまを踏みしだけでも

芝區愛宕町の對陽館に止宿せる宮崎寅藏君を訪問しけるに警察
の注意厳しかりければ

さしも世に憚り多き柴の戸を叩く水鶏の音などがめそ

八月四日浦鹽斯德に到着以來雨いたく降り續きければ

耳なれて今はうしとも雨滴の音にのみこそ聞き流しけれ

八月六日軍艦松島秋津洲の歡迎會に臨みゑひしれて家に歸りて

醉さめの水汲む人しあばらやは軒もる雨の外なかりけり

八月十六日矢野太郎君の陸路露都に出で立つを送りて

旅衣野山に結ぶ草枕露のさわりもあらじと思ふ

八月廿八日人に送る寫眞の裏に書きつく

生ける甲斐あるにあらねどをのこわれ死ぬるからだにあにかならめや

九月十日男世帯のおかしき様を詠める

虎を撃つ荒くれ男あな哀れ奪取る手は力なくして

ブラゴウエチエンスクに在る辻暎君より黒龍江岸紅葉の絶景なるを報じ越しければ返書の末に

紅葉の散りて流れて黒龍の赤き淵瀬となりやしぬらん

十月浦鹽斯德に澤克己君突然來訪しければ

今更に別れし後の二歳を夢とぞ思ふ今日相見れば

三十三年七月六日新嘉坡を出立する時同行の宮崎寅藏清藤幸七郎兩君頻りに留めければ詠みて示す

引き留めてとまらぬものは梓弓矢よりも早き心なりけり

三十四年神谷町仙石山に住ける時月夜虫の音を聞きて

泣く虫の聲は高くも有明の月より落つる露の草叢

三十五年夏黒龍會に於て毎日同人と相撲を試みて樂み居るほど

に、或る日解き捨てし帶を奪はれ外出もならざりしを、側信夫君縮緬の帶を持ち來り『白浪の跡追ひ行くや濱千鳥』の句を認め添へて與へられければ

白浪の跡なく消えて濱千鳥泣く音哀れと君や聞きけん

三十六年秋二六新報が征露の歌を募るを見て同社に在る末永純一郎君に贈る

荒鷺と云へば恐ろし武夫が矢にはぐ鳥と見れば悲しも

三十六年の秋渡韓の途次時局を慨して財部熊次郎君に贈る
今更に何をかいはん大丈夫が思ひ立つべき秋は來にけり

韓國京城滯在中王宮の後に月の入るを見て所感を歌ふ

思ひきや韓のこさしの宮柱傾く月の影を見んとは

韓國より白菜を持ち歸りて諸友に分つ時

韓の野の虎も狩り得ず持ちてこしこの家苞はなのみなりけり

十二月五日郊外を散歩して述懐

霜雪のいかに降りゆく世なるらむ木々の紅葉の影も留めず

十二月十九日新古撮影の寫眞を見て

年々に大人びてこそ見えにけれ幼な心は未だ失せなくに

歳暮の感

來ん年は來ん年はとて頼みてし今年の歳も早や暮れんとす

三十七年勘察加遠征を企てける時

國の後蝦夷が島根は霧こめて渡島の海に雁なきわたる

我が軍遼陽を占領するに及びて列國の人々初めて日本の進歩を認め文明を賞讃するに至りければ詠める

撃つ太刀の火花よりこそ敷島の大和心は匂ひ初めけれ

安永東之助君戰死の報あり。君嘗て予に謂つて曰く、相者我が顔を見て劍難の相ありと、男子の本懐何ぞ之に過ぎん。予答て曰く大丈夫固より婦女子の手に死せず屍を馬革に包むの覺悟なかるべからず。然りと雖も吾人の屍を馬革に包むは、蓋し國家慶

事の秋にあらざるべし。願くば國家をして吾人を馬革にするの不幸あらしめざらんことをと。君默笑して善と稱す。嗚呼當時の言惡占をなし、遂に屍を滿洲の原野に曝せり。感慨の情に堪へず蜂腰一首を詠す

益良雄はのとに死なじと君が言ひしその言の葉を見しぞ勇々しき

三十九年二月廿六日伊藤統監に隨行し宮島驛を發す。時に降雨烈しく、附近の山上を望めば白雪皚々として尙嚴冬の觀あり。然れども山下の村落は既に梅花の綻べるを見て

降る雪の山下風も寒からで春とはしるき梅の花哉

四月末つ方北韓旅行しける時

韓の野は董たんぼゝ岩つゝじあやめも咲けり人待ち顔に

四十年五月妻を京城に残し我れのみ歸朝する時

妹を置きて去んとすれば故郷の空も旅路の心地こそすれ

韓皇の乾元節に参加せる日本人韓吏等が時憲書を拜受して臣と

稱しければ

敷島の大和錦もいつしかに韓紅に染みにけるかな

韓皇三南を巡幸し還つて又た北韓行幸あり我が對韓政治の前途
頗る憂ふべきものあるを認めければ

逆まに流れ初むらんありなれの河風寒き御幸なりけり

四十二年七月廿二日宋秉峻と相州松濤園に避暑しける折

寄る波の音も涼しき松風は降る亞米利加の岸よりや吹く

我が對韓政策の定まらざるを慨し

はぎ取りつ又きせて見つ韓衣大和錦に替へんとはせで

髪を剪りけるに白髪を生ひ出でたるを見て戯れに詠める

うば玉の黒髪山におく霜の白きを見れば老にけらしも

年來密々畫策せる事ありて四十二年九月十八日韓京に入りける
に、政客雲の如く我が北部齊洞の山莊に集ひ來り、廿四日大雨

にかゝはらず訪客尙ほ途絶へざりければ

雨の足繁くも人のをとのふは降り亂す雲の居ればなるらん

十二月四日一進會をして日韓合邦の上書を提出せしめしに世論
やかましくなり立ちければ五日に詠める

鳴る神の音より先に落ちにけり響に騒ぐ人ぞ多かる

日韓合邦に反對せる曾根統監病んで片瀬に居られければ詠める

韓の野を照らす光は朧にて片瀬の浦に沈む夕月

四十三年一月雪中述懷

此の上に積れとてしと思はねど尙ほ降る雪の面白きかな

八月二十九日韓國併合の發表ありければ

韓衣たち合せても見つるかな我が敷島の大和錦に

今日よりはありなれ川にみそぎして天照す日の影仰ぐらん

刀 劍

事足らぬ身にしあれども大和男人に譲らぬ太刀は持ちけり

拔 刀

叢雲のかゝる憂ひも柄の間に鞘より拂ふ腰の太刀風

欲得 兩刀

何れにも離れかたなの身にしあれば思ひきるにも切られざりけり

日に幾度となく刀を取り出し樂みけるを見て家人の笑ひければ

劔太刀抜きても見ずば大丈夫の心やるべき道あらなくに

琵琶を聞きて

四つの緒の掻き亂されし世ならねど尙ほ憂き節の音をのみぞ聞く

乞 食

せなに泣く子をすかしつゝ物乞ひの哀を賣るも涙なりけり

屑屋の空籠を肩にしつゝ通りけるを見て

廢りものなき世ならねど屑買の籠も空しく歸る夕暮

亥の歳正月三日車上に新月を見て

怒り猪の利牙にかけて天地を裂きてかゝるや三かの月影

猪を畫ける袱紗を貰ひ其の畫に題す

我れに似し獸とや見む怒猪の常には眠る萩の下蔭

花邊去るに忍びず

東風に花の袂をひるがへし行かんとすれば鶯の鳴く

古事記の意に擬へて所感を歌ふ

くらげなす漂へる韓に神集ひ根のかたす國と爲しませる哉

敷島の根のかたす國となりませる其の國寶數々にして

泣きいさちあらぶる鬼は鬼やらいやらいて渡せありなれの河

五月京城にて明石將軍の歌に和せる二首

諸越の虎伏す野邊と來てみれば牛の歩みのいと靜なり

開城満月臺

いそのかみ古き臺も月影の満ちては缺けし跡となりけり

途上偶感

真心の我まゝにして通らばやたてよこしまの道はありとも

連日の降雨晴れ渡りて月の清ければ

月影は今日ぞ初めて秋の夜の心の限り照り渡りける

折に觸れて

人やりの道ならなくに國の爲め心つくしの大丈夫憫れ

頼みある友あればこそたゆみなく海の内外の事をなしけれ

月とわび雲とかこちて天の原空しく過ごす身を傷むかな

刀を賣りて

身に代へて持たまくほりし劔太刀よし賣るとても我名錆めや

案山子

盾なしの鎧も徹す秋風に案山子の小太刀なになまるべき

繼子

つれなくも親にしあればまゝ親のまゝに仕ゆるまゝ子いとしも

十月三十一日の夜

呀え返る月と己れはなか／＼に距つる雲もなき世なりけり

十一月一日、妻なる人の先つ頃我が旅立ちけるを送りて世田ヶ

谷に歸る途中、そびらに月の照りければ『都より送り出づらん

月影を見返りがちに急ぐ我宿』と詠みたりとて示されければ、

おかしき歌なりとて之に和す

我妹子が歸る野道の淋しさに一人はやらじつきそひて行く

京都木屋町の三樂亭に泊りて

影落ちて流れもあへず加茂川の水に浮べる月のさやけさ

七月四日起て薄暮の窓外を望めば連日の雨未だ霽れず附近の細

民宿物哀れに見へければ

竈たく賤が伏屋の夕煙幽かになびく梅雨の空

郷里より上京せし老人が母に向ひて四方八山の話の末、國元の
 伴より歸郷を促さるれども、此の地の孫に引かされて、歸るも
 物憂しと申されけるを聞きて

老の身は子よりも孫に引かされて立つも物憂き旅路なるらむ

相馬より歸京の途詠める

岩をかみ碎けてかへる白波は幾度よせて思遂ぐらん

運動

わびぬれば臂たゝき四股ふみて獨り相撲の面白きかな

四十五年二月十五日、佃信夫君伊豆の國土肥温泉より手紙寄せ
 られたる中に、擬_ニ在五中將言問之吟_一とて『名にし負はゞおと
 づれ聞かむ我が思ふ人やいかにととひの濱風』と云ふ歌ありけ
 れば、返しに

とひもせむ問はれもせめや濱風の伊豆のいでゆに君し在せば

本城安太郎君より東久世伯の百ヶ日法會に參拜し詠みたりとて

追懷の歌寄せられければ返しに

七草のその一と本も枯れ果てゝ思の種どもへ増りけれ

四月二日海山李容九君の病を須磨に訪ひて

面やつれ腕もやせていたつきの君を見んとは思ひかけきや

四月廿八日小美田隆義君を伴ひ海山李容九君の病を問ふ海山喜
 ぶこと限りなく宋君と予があるを以て心安しと云はれければ

海山は距てざりけり逢阪の關のこなたに我しあなれば

李容九君病革るの日宋秉峻君と須磨花月華壇に於て往事を語り
 つゝ

ふることを語り出づれば諸共に涙なりけり須磨の村雨

五月二十二日午前九時李容九君身まかられ御靈移しありければ
 其席にて詠める

新御靈鏡に留めてとことはに皇御國を守りませ君

大阪にて新聞にことゝしく情事を掲げられければ戯れに

しきしまの益良猛夫は草枕尾花に結ぶ夢もありけり

名古屋にて雨降り徒然なるまゝ同行の益榮に示せる歌

五月雨てあやめもわかぬ夜なりともふりなみだしぞ垣の卯の花

益榮の返し歌

五月雨のはげしき夜半は卯の花の散りも果てなん心地こそすれ

木挽町田中屋の茶室の外壁に井上世外侯筆一枝庵の懸額あるを
見て

折り結ぶ其一枝の庵こそ人知れず住む心なるらめ

六月廿三日武田範之和尙の一周忌に當るを以て諸友を招きて法
事を営みけるが、其席にて詠める

五月雨し去年の歎きを偲び音にくり返しても鳴くほととぎす

野 花

野の花は人に知られていくたりの手毎折られし枝も見えけり

述 懷

今こそあれ我ももとより男子山世に仰がれて立たんとぞ思ふ

炎 暑

夏はたゞ暑しと云ふてやみなまし火にも水にも入らむ男兒は

四十五年七月二十日大阪滞在中

聖上御重患の新聞號外を見て晴天の霹靂とも覺えければ

九重の宮居の奥にむらくものかゝるべしとは思ひかけきや

七月二十六日 聖上御惱増させ給ふと聞へければ

みいたつきとく癒えませと打ち集ひ民のことく祈る今日哉

七月廿七日 聖上の御容態良好なりと承り

大君の御氣色よしと夕立の雲の上より洩るゝ嬉しさ

七月三十日 聖上登遐まじくければ 聖徳のほどを忍びまつりて

末の世の末となりにし末の世を又た肇國となしゝ天皇

大正元年八月七日歸京の汽車中富士が峰に雪の斑らなるを眺めて

富士が峰に夏も御雪の白妙は打ち仰ぐだに涼しかりけり

秋氣を覺ゆ

吹く風の音も遠はず人の身に秋を覺ゆる夕べなりけり

八月二十一日月を見て

片割れの月と思ひを合せ見ん缺けたるよをば歎く我とて

九月四日世田谷元宿に歸る途上

おのがじし歸りを急ぐ夕暮は電車に人の多くも乗る哉

雲

雨かはた嵐や來らん雲足の恐ろしげなる空にもあるかな

虫 聲

我が歎く涙の露のをちこちに絶え入るばかり鳴く虫の聲

折に觸れて

成りもならず事に敗れし我ならばはやも止まんをやわか止むべき

日韓合邦運動の爲め大負債を生じ其の整理をなすこととなりければ

雁金の空に消えゆくよしもがな春はまだしき我が身なれ共

乃木將軍の遺書を読みて

紅葉の散りてし色に残りけり物の哀も大和心も

雨の降るに月の照りければ

雨雲の斷え間を洩れて久方の月影散るや軒の玉水

郊外所見

土塊をうちて唄へる男子等が姿には似ぬふしのやさしさ

我もまた土塊をうちて歌はゞや心を碎くふしのたえねば

農園を營める弟に示す

鋤き返し打ち返しても益良雄の心の花を種と播きてよ

益良雄の子等が持つなる鋤鍬のすきにはまなべやわら相撲を
鋤鍬のすきもいとまもあらかねの土踏みしめて稼げ益良雄
あらがねの土戴きし人もあり千々の寶はこれよりぞ成る

嵐 山

嵐山やまの半ばは紅葉して只松のみぞみどりなりける

十一月十九日午後時雨來らんとする天候なるの折、小美田隆義
君と山縣元帥を京都無隣庵に訪ひけるに、庭中 先帝恩賜の松
あるを見て詠める

御惠の露こもるなる松の木に時雨を添ふる庭の面哉

十二月二十四日大阪にて月の明かなるを見て

四つの時月見ぬ月はなけれども之れや今年のつきの影かな

大正二年一月十八日夜雪降りければ

消えやらぬ去年の名残のあるものを積み重ねても降れる雪哉

四月三日旅より歸りけるに櫻花既に咲きおりけるを見て

櫻咲く都大路は花雪の雲井の庭となりにけるかな

九日に詠める

花吹雪散るや櫻の庭のおもに淋しくそゝぐ春の雨かな

落 花

静々と散り行く花の姿こそいふにやさしき風情なりけり

春雨の空は雪氣と時變へて散り來る花の白く積れる

十一月二十二日所感を詠す

今日は西明日は東に時雨來て紅葉や散らむ秋津島山

世の中はばらの垣根の横道を危ぶまぬまで酒に酔ひけり

大正六年四月七日選舉應援のため東都を出で立たんとする折櫻
の盛りなりければ

立ち騒ぐ世にしあらずば櫻花見てや暮さん惜しき春かも

宮本千代吉君身まかりければ

散りやすき花よりも尙ほ益良雄が春を残して逝きし哀れさ

井上藤三郎君が結婚式に列りて詠める

杯の數を重ねて百年の君が契りを祝ふ目出たさ

八月十五日箱崎八幡宮に詣で

箱崎の神の御前に鳩むれてぬかづきあふぞおかしかりけり

暑 熱

汗のみは雨と落ち來て夕立の雲さへ見えぬ暑さなりけり

八月十七日大阪にて大雷雨ありければ

鳴神の空恐ろしく響きけりいづこに落ちて人驚かすらん

天地を貫くものは波たゝ神はためき落つる力なりけり

子 供

何事か物言ふらしとうなゐ子に耳傾くる親心かな

幼な子の笑顔し見れば忘らるゝ昨日のうさも今日のつらさも

醜しと人は見るとも掌の中の玉と愛づるは我が子なりけり

生い立たせかくせばかくも成りなんと末樂むは子供なりけり

善きにつけ惡きにつけて痛むなる親の心を哀れなりけり

八月廿五日旅より歸りたるに老母の病危篤なりければ神明の加護を祈り奉りて

限りある命なりとも限りなき世に生魂の神護りませ

九月末つ方東海道汽車中稻田を眺め

小山田の早稲と晩稻を吹き分けて黄金の色に變ゆる秋風

黄土を鐵にする研究の成功しければ

神代より言ひ傳へたる荒金の土てふものは眞金なりけん

九月三十日中秋満月の夜大阪地方は大暴風雨にて洪水となりけるが翌日の夜は一點の雲なく月の明かなりければ

吹き暴れし昨夜の雨は白雲の影さへ留めず澄める月かな

上田黒潮君より『鳴きすだく虫の聲々いち／＼に聴き分けられぬ忙しの世や』と寄せられければ返しに

虫のみか世の口々もきゝ流す身こそ安けれ秋の夜の月

十月二十五日大雨頻りに降り我家の雨洩り甚しければ

洩る雨の古屋はとひも朽ち果てゝ軒にうらみの瀧ぞ落ちけり

十月三十日大阪地方は洪水の爲め多數の人民騒ぎ立てければ之を検舉し嚴罰に處すべしと道岡警察部長が放言せる新聞記事を見て

洪水に漂ひさわぐ民草をなど縛めの繩にかくらん

川堤つくろふ繩に民草を繋ぐ獄の鬼も居りけり

上田黒潮君より寄せられたる歌の返し

降りつゞく雨にうたれて千里行く駒のあがきもたゆみやはせん

近藤中軒君余が故友高崎安彦男の妹君の歌なりとて

まろびいづる玉かとばかり琴の音の糸のほかなるわざもあるかな

君が手の琴にふるれば松風も峰の嵐も引かれよるらむ

の二首を示されければ小督の古事を懐ひ出て

引きよせし駒の手綱も妻琴の調べ妙なるわざにありけむ

近藤中軒君より『仇し世のなき名たつ身は思ふどち浅からざり

しとがにやあらぬ』とよせければ返しに

仇し世に浮名立つとも岩清水流れて後ぞ澄み返るべき

十一月九日製鐵試験を行ひ好成绩を得ければ

眞金吹く數そひ行かば細矛千足の國の名には背かじ

大正七年正月二重の御橋のほとりより皇居を拜し

九重の八重の宮垣隔てなくひとゑに仰ぐ雲井なるかな

七月一日末永一三君の三女恒子の亡き骸を火葬場に送る途中所感を詠みて一三君に示す

目に笑顔耳に泣く音の失せやらで残りこそせめ君が歎きの

七月半ば大阪曾根崎の宿にありて

年ごとにきつゝ慣にし夏衣脱ぎても暑き曾根崎の宿

七月三十一日鈴木重兵衛君に案内せられ鹽釜神社に参拜し松島に至りて

松島の小島の數の一つだに眺め見あかぬ景色なりけり

漕ぎ出でて月や待たなん松島の島根淡くも日は暮れにけり

九月一日兄嫁身まかられ歎きの中に日暮れ雨降り出でければ

虫の音の今宵はわきて悲しきにしとゝ袂を濡らす雨かな

十一月五日 伊勢大廟に参拜して

天照す神路の山に入りてこそ古き御國の本は知らるれ

祈 願

國を呪ふ醜のやからを吹き拂ひはらひ清めよ伊勢の神風

勅題 朝の晴雪

差し昇る朝日に晴れて大空のつゝむ限りは雪にぞありける

蚊

人の身も飢へずば蚊帳の外になくかほどに物は思はざらまし

早朝箱根山を越ゆる時

ほのゝくと明くる箱根の道芝に昨夜の露の玉ぞ宿れる

大正八年も將に暮れなんとし轉た感慨の情に絶えず

瀧川の水より早く年月の流れて變る世にもあるかな

事繁き世の営みに年月の過ぐるも知らでありけるものよ

面白や憂き節しげき年月も過ぐれば語り草となりなむ

勅題 田家早梅

堆たかく積める軒端の藁蔭に去年より早く匂ふ梅ヶ香

池田弘君が獄中生活を思ひやりつゝ國士刑に隱るゝの不得止事あるを感じ詠める

獄より外にあらしな隠れ住む里も御山も塵の世なれば

雲 雀

麥畑の廣き御空に上げ雲雀集籠る雛を見てや鳴くらん

螢

宵の間に群れし光も消え失せて數ふるばかり飛ぶ螢かな
螢狩り袋に入れし家苞の歸る野路を照す嬉しさ

光るよと見ればかつ消え螢火の照す間ごとにうつる河水

六月九日弓射る夢を見て

うつら／＼眠にいるや張弓の弦音高くさめし夢かな

蛙

月黒く五月雨るゝ夜は口々に聲惜ますも鳴く蛙かな

梅雨期に入りて雨降らざれば

五月雨を厭ふ都に引きかへて雨待ちわぶる植付の頃

農 事

麥はみな取り入れられて鋤き返す小田に水引く寺内の里
昨日見し畑は水田となりにけり明日や乙女等早苗取るらん

七月十四日京城にて朝鮮政治の狀態を見て詠める

刈り取りし柴を枕の夢の間に野焼の飛火燃えたちけり
韓草の枯葉に移りし火は早く燃え廣がりて消すよしあらじ

七月廿六日汽車中所見

田草取る泥手ながらに指さして笑ふ乙女の目もと涼しき

箱根を過ぎて

山水の漲り落つる流れより早く過ぎ行く川沿ひの汽車
暗くなり明くなり行く下道をいくつか過ぎて越ゆる箱根路

近藤中軒氏より『東の山を仰ぎて谷水の流れにのぞむわがいほ
りかな』と歌よせられければ返しに

谷水に耳を洗ひて東の山の眺めに目を拭はゞや

勅題 社頭曉 大正十年元旦

四つ文字のかゝる空よりあかつきの松も色ます箱崎の宮

松原未だほのくらき箱崎の濱よりしらむ宮の玉垣

日本男子

敷島の大和男子は櫻花いつも盛りの心なりけり

刀

掛け並べ見るもゆゝしき腰刀身にうちこめし大和魂

淡路島

音たかく鳴戸の海の潮より浮び出でけん淡路島山

釣舟

淡路瀉沖の鳴戸も夕風に漕ぎつれ歸る海人の釣舟

鵜鳥

鵜の鳥の捕りし魚はみなゝがら人に捧げて水くぐるとは

大正十年二月廿七日 日嗣の宮の御外遊延期を日比谷大神宮に
祈願し奉るとて

手力の命に詔りて出でましの車とめませ天照す神

三月三日 日嗣の宮の御外遊出でましを拜し奉りて

高輪の御階静かに下り立たせ雲井の外に出でませる哉

御發輦の日地震二回ありければ

地震りて山は割くとも高光る日嗣の皇子にさわりあらしな

鷲人原が阿片に満鐵にあらゆる公財を盗めることの暴露しければ

國財限りもしらに盗みおきて事もなげなる面そも憎し

自黨の惡事暴露するに及び他黨の惡事を指摘するの公開狀を見て

盗人の猛々しくも呼はりぬ人も盗のあるが如くに
隙き間なく負へる傷手に指し違へ死なんとするは盗人猛し

御外遊の途 皇太子の御船沖繩に寄せ給ふと聞き

御座船の舷洗ふ波さへも沸き返りてや迎へまつらん

三月十三日寺内の農園にて風いたく吹きける夜

天津風吹きすさむごと我が胸のいたくさやぎて物くるをしも

躍 魚

空のごと澄み返るかと躍るらん魚にいよゝ濁る濁り江

五月十五日朝鮮にて

禿山も青山なしぬ百年の後の榮を松の緑は

韓衣たち縫ふ業の拙さを巧みにかへて繋ぐ糸針

六月二十三日連日の梅雨忽ち晴れて月明かなりければ

五月雨れし空も今宵は天の原晴れ渡りたる月の影かな

晴れ間なく人の心も五月雨れし空より洩るゝ月のさやけさ

今年初め方ゆくりなく父上の病み給ひ八月に至り殊の外衰へ給ひければ

呉竹のおきふし長くましませと祈る心の外なかりけり

九月二十二日午後十時十五分父君失せ給ひ翌日雨降りしきる中を桐ヶ谷火葬場に送り奉る時

はふり落つる涙の雨にぬれつゝも歸らぬ父を送る悲しさ

九月二十九日安田善次郎を斬殺し自殺せる朝日平吾君の遺書到來しければ

世の中の人の心を洗はんと流す血汐の尊くもあるかな

かくばかり思ひ切らずば朽繩のむすばれ解けぬ世とや見にけん

朝日さす窓のあたりの紅いに夢驚かす人もありなむ

十月末つ方わが持てる盆栽の梅三鉢とも満枝花咲きければ不思議に感じ詠める

魁けて世に示せとや梅の花諫め顔にも咲けるなるらむ
時ならぬ花を見るこそ嬉しけれ梅の香の身にししみれば

安藤照子に所望せられ蘭の鉢植を贈りたるに『心ある人にぞ告げん破れ果てし庵の庭に蘭の一本』と歌よせられければ返しに

我が心添へて贈れる蘭の香の君が庵に匂へとぞ思ふ
世の憂さは逃れざるらん君が住む庵も同じ年の暮れ行く

歳暮所感

世の憂さはつき果もせて身にうさを添へて行くらん年の暮そも

勅題 旭光照波

旭さす大和島根の海原に波の花こそ光り添へけれ
横雲の海をはなるゝあわいより波輝やかす旭出しかも

命

浮き沈み流れて早き年月に残れるものは命なりけり
永らふも限りある身の命もて果てなき末を思ふはかなさ

朝も晩も鶯の鳴きければ

朝な夕な鳴く鶯は籠にありて夜晝さへもわかぬべらなり

時事有感

人あれば人の道あり道あれば人の面足り國常立す
常立の道破れても顧みぬ大臣は何の補弼なるらむ
朽ち果つる三筋の綱や繕はんいとより／＼の力合せて

白蓮の『踏繪』を読み女性の歌として骨力ありて氣慨ある調格なれども餘りに肉性的慾の迸はしれるものあるに一驚を喫せしめられたり

女流歌人として白蓮と並び稱せらるゝ九條武子の著『金鈴』を読むに及び女らしき情味の作多きを認め兩者の歌に對し我が所感

對踏繪歌

白蓮 われといふ小さきものを天地の中に生みける不可思議思ふ

居候堂 不可思議と思ふ愚さ天地の中に生れしのみあり蚊あり

白蓮 瞬間は稻妻のごと來り去るその束の間をわれ人にして生く

居候堂 人にして生くれば人の踏ぬべき道あり義あり君知るや否や

白蓮 有難き御經ぞとて示さるゝ白衣の人にすぐせ問はゞや

居候堂 紫のゆかりも深き藤原の貴きすぐせ知らぬ君はも

白蓮 天地の一大事なり我胸の秘密の扉誰か開きぬ

居候堂 南無三寶秘密の扉開かれぬ間男しぬと示す手紙に

白蓮 人の世の衆生歡喜の聲よりも吾に足ること吾に尊し

居候堂 足ることを知らぬ姪婦の歡喜天逆しまに讀むラマの經典

白蓮 遙かなる君の戀しも大海の闇の奥より遠鳴すれば

居候堂 大海の闇の奥より吹き荒ぶ戀風魔風おそろしの君

白蓮 願はくはめぐる幾世の末かけてたゞわが魂の清かれところ

居候堂 我が魂の清かれところ願ひてし人は蓮葉の女なりけり

白蓮 其時は門の小笹の風にゆれて夕はへの空に思ふ人のありし

居候堂 色男きては門邊の小笹原口笛ふきて行きかいにけん

白蓮 今こそあれ吾死なむ日は秋の野の花の如くにあらなむ願

居候堂 淪落の人の最後は野晒しの骨ともならむしやり頭かな

白蓮 罵りのしもともて打つ世の人よ知るや吾が名は女といふ

居候堂 罵りのしもとの下にざんげせよ十指のゆびさす處夫れ違はじな

白蓮 筆をもて吾は歌はじわが魂と命をかけて歌生まむかも

居候堂 君が生む歌は色情狂か狂戀ぞつもりて歌となりぬる

白蓮 君に會ひ泣くべき時を命にて秋の七度生きてゐしかな

居候堂 情人と寝て幾度めせし七度も死にては生きし命なるらむ

白蓮 あひ見てはすねても見たく別れては泣きて憐み乞はむとも思ふ

居候堂 別れてはつい又逢はるゝ身ではなしすねてすねかね憐みを乞ふ

白蓮 後の世はあだともなれや今の世に死もゆるさるゝ罪にてもよし

居候堂 後の世も今も許さぬ罪を冒し道ならぬ戀に生きんとはすゝ

白蓮 待つ人のあるが嬉しさ山越えて君にと急ぐたそかれの道

居候堂 たそかれの野越へ山越へ行く人の心に宿る待つ人や誰

白蓮 何を怨む何を悲しむ黒髪は夜半の寐ざめにさめ／＼と泣く

居候堂 黒髪の亂れし君が心こそすき返すべきすべなかりけれ

白蓮 天人の五衰のなげき悲しくも寂滅と云ふも吾が世の掟

居候堂 遂にゆく掟に背く執着の心悲しむ五衰寂滅

白蓮 年経ては吾も名もなき墓とならむ筑紫のはての松の木かげに

居候堂 千代かけて心つくしの迹もなく戀の墓場に入りけるかも

白蓮 誰にいひ誰に聞えむすべもなき涙の糧にわが歌は成る

居候堂 迷る戀の生血に成る歌は赤き心の裏か表か

白蓮 わが足は大地につきてはなれ得ぬその身もてなほあこがるゝ空

居候堂 浮氣女空にあこがれ土踏ます土にも足はつかぬなるらん

白蓮 命より命生れて幾かへり花より色も生れしものか

居候堂 花より實實より元木になる如く色より色は生れしものよ

白蓮 こともなく終へむわが世の運命にも君を得し幸失ひし幸

居候堂 山幸ちとかへし海幸ちさちはなく釣針失ひし歎きをやせん

白蓮 大わたつ海夕日の色のあか／＼と燃ゆるさ中に身を投げてまし

居候堂 身を投げて沈む夕日のあか／＼と海の底より輝かばよし

白蓮 わが爲に泣きます人の世にあらば死なむと思ふ今の今いま

居候堂 君か爲め泣く人あまた出来にけり人の人たる道の破れて

白蓮 夢かあらぬうつゝかあらぬ遠方の雲のあなたに吾が名呼びます

居候堂 君が名を呼びますものは不知火の肥後の玉名に生れし男

白蓮 何故に誰が爲めにかも生れこし此一事を七年おもふ

居候堂 子の母と云はれん爲めに生れこしこの一事だに知らぬ哀れさ

白蓮 眠りさめて今日もはかなく生むため偽りをいひ偽りを聞く

居候堂 うそからも出づる誠のあるものをなど偽に生きんとすらん

白蓮 泣きぬれて今來しものを哀れとも驚きもせであひ見る人よ

居候堂 痴話狂ひ泣きにぞ泣きて來し君をなどか哀れと人の見るべき

白蓮 雪の道君に逢ひたさそる來ぬといふ人あらば夢に來よかし

居候堂 雪の道一足づゝに跡つけて行くも歸るもあひびきの夢

白蓮 一を二と讀むすべ知らず知らざれば智恵足らぬ子とかろしめらるゝ

居候堂 二二が四と算ふるすべも知らざれば智恵足らぬ子と人は言ふなり

白蓮 水の如流れ行く身のおもしろや浮べる月も散り來る花も

居候堂 流れては末のうき身を如何にせん月も照れ／＼花も散れとや

白蓮 わがわれに與へんとするは百年の後に生くべき物語ふみ

居候堂 百年の後に生くべき道は忘れ笑ひ草こそ世に残しけれ

對 金 鈴 集

武子 ゆふかすみ西の山の端つゝむ頃一人の吾は悲しかりけり

居候堂 二人居て悲しき折もあるものをまして一人の夕かすみかな

武子 かりそめの別ときゝておとなしうなづきし子は若かりしかな

居候堂 若かりし心悔ゆらん立ち別れ吹かぬ日ぞなき峰の松風

武子 見渡せば西も東もかすみなり君はかへらずまた春は來し

居候堂 心さへ空さへ霞む西東おぼつかなくも又春やきし

武子 いくとせをわれにはうとき人ながら秋風吹けば戀しかりける

居候堂 うとまれていと戀しさまざるらむ物の哀れや秋の風吹く

武子 あけくれをわびて暮せば部屋のうち春寒して梅もかをらず

居候堂 わびぬれば火桶いだきて櫻炭春の心やかき起すらむ

武子 うらみごときこえむ時をまつ身にはこの玉の緒もたふとかりけり

居候堂 恨みごとあるが如くに覺ゆるは逢ひ見るまでの心なりけり

武子 よき月夜すあしのつまのほの青う露にぬれたり芝生に立てば

居候堂 月影をふみて芝生に君立てば露も袂に入らんとすらむ

武子 いとほしと悲しとかつは思へどもつよきしもとに我心うつ

居候堂 われとわが強きしもとに鞭うちて心ゆるめぬ君ぞ尊き

武子 雨がふる涙のやうな雨がふる寂しやこよひとくいねてまし

居候堂 降る雨とともに涙や流るらむ身も浮くばかり寢屋のふしどに

武子 別れては千萬言の言葉より黙してあるか嬉しと思ふ

居候堂 口ほどに物言ふ目もて見かわさば別れの言葉あらずもあらなん

武子 春かすみ峰よりわれにやはらかう天つ薄衣そとかけてゆく

居候堂 そとかけしかすみの衣吹き拂ふ力も薄し峰の春風

武子 あふぎ見れば月は澄みたり忘れなむ涙すとてもなにのかひそも

居候堂 澄み渡る月にや落ちん天の川流るゝ星のめたゝく涙

武子 風心地三日こもればうばが膝に子供のやうな無理も云ひたや

居候堂 乳母が手に取りすがりつゝむつかりし子供にや返る背子とはなれて

武子 片すみに追ひのけられてそののみか忘れはてし我にやはあらぬ

居候堂 忘らるゝ人にはあらじ背の君の背にも腹にもかへられぬ妻

十年二三月頃刺客の我れをつけねらい居たるを聞き

千萬の人の中にも一人行き眼はまじろがし命死ぬとも
生き死の中やつなげる魂の緒のつよくも吾はありけるものよ

山縣公薨去せられければ

永遠に忘らるべしや韓國を公と謀りて公と併せし

絶對平等は死のみなりけり

必滅の死の前に立ちて觀すれば人間萬事平等の春

二月二十七日普選案の可否議決せらるゝ日雪の降りれば
立ち騒ぐかひこそなけれ普選案ふわりく春の泡雪

櫻

日の本に生れし幸ぞ見えにけるさくや櫻の花の曙
よしや降る雨にぬるとも櫻狩り花の袂をしほりてぞ見ん

王仁の墓

日の本に傳へし書の道とともに残れる王仁の奥津城所

四月八日寶塚溫泉にて

津の國の武庫の郡の寶塚寶はつきぬ泉なりけり

五月八日曾根崎の宿にて

小夜更けて人の命を刻みゆく時計の音の胸に響くも

六月二十三日寺内農園にて

つゆほども五月雨はせで苗代の水は涸田となりにける哉

七月三十日

山に登り水にも入りて暑を避けんいとまだになく心だになし

八月七日

氷さへ見る間にとけて沸き返る暑さ防がんすべなかりけり

八月二十三日曾根崎宿にて

百度にも近き伏家の青すだれ洩り來る風のなき暑哉

所 感

百年の半ばの道をたどり來て登りも果てぬ富士の高山

九月十二日詠める

病みふして日數つもればむら肝の心いらちて憤ふろしも

九月廿八日病を勉めて大阪に來り夜中眠らざりければ

ころ／＼と右に左に寢返りつねも寢苦しき夜たゞ更け行く

寺内農園に居宅を建て

我が家の狭くはあれど庭廣く眺め見あかぬ景色なりけり

十月六日泰榮が歌を聞きて

大人さへ及ばぬ節を三子より簞鷺の歌ひ初めてき

時事有感

何時しかに吹きや起らむ夜嵐の音より先に醒めよとぞ思ふ

寺内農園の秋風

秋風は吹きもつくさず葡萄葉の散り行く音の騒がしき哉

枝誘ふ時は來にけり音たてゝ葡萄の棚を渡る秋風

木村重成

腹黒き人の心をさすがにも色薄しとやなじりけんかも

十月十六日早朝新聞紙上に新年の勅題發表せられたるを見て直に詠める

曉の空より白く富士の山雲の帳を出でつゝ立てり

十月二十三日平塚嘉右衛門君に招待せられ寶塚に於て頭山満寺

尾亨肥田景之の三先輩及び諸友と茸狩をなし詠める

茸狩りの今日の遊びは寶塚山の草木をわけて嬉しき

十月二十七日京都市外岩倉村に於て又た三先輩等と芝野友次郎

君の催されたる茸狩に行き

晴れ渡る空嬉しくも山中に木の葉をわけてとるや松茸

北京に在留せる兄の病危篤に陥りたりと聞き

諸越の北の京に病みふせる兄哀れなり幸薄き兄

十二月十三日午後八時過ぎ病兄死亡せりとの電報翌十四日午前
八時頃到着しければ

今ま一と目見まほしかりき去年の春別れしまゝに歸らざりせば

年の終りに詠める

いざゝらば今年も暮れぬ梅の花明くる春こそ世に匂ふらめ

大正十二年一月六日の夜寺内農園にて

立ち昇る月諸共に千里山麓の道も隈なかりける

一月八日寺内農園にて子供の来るを待ちしも遂に來らざりければ
天地の中に輝く星一つ今宵は見えず獨かも寝ん

一月十日の夜八時過ぎ富岡の母死去せりとの電報に接し

一昨年も去年も今年も藤衣重ね／＼し歎きをぞする

近藤中軒氏より酒の歌數々寄せられければ七月三十日返を送る

忽に人の心を慰むる道こそ酒の外なかるらん

八月半の頃青森縣の石油鑛區調査の爲め人を出で立たす時

古ゆ黄金色咲く陸奥の油川のおくの石油汲まふよ

九月一日大地遽かに震動し家屋の倒るゝもの數を知らず火は各
所に起り殆んど全市の七分を焼き盡しければ

地はゆすれ家は倒れて武藏野の焼野の原となりになるかな

大正十三年一月元旦勅題 新年言志

世の姿かへばや替へん新玉の年の初日の登ることくに

一月十一日寺内農園にて

いびきかくおやじのそばに寝言いひ泰榮はねたりいとし子泰榮
添寝して教ゆる親に習ふ子の眠りもやらで聞く話かな

御慶事を祝ぎまつりて

皇祖賢所の大前にみあひますもよ天津日嗣の

一月廿六日攝政宮御慶事に當り同志百五十餘名の士とともに明治神宮に参詣し金の幣奉るとて頭山滿翁田中舍身居士余の三名代表者となり神殿に昇り参拜するを許され恐みく神前に進み詠み奉る

みあひます今日の足る日に皇祖明治の宮に幣奉る

雨中の森

降る雨にしよんばり濡れてうなたるゝ森の木の葉にそつと風吹く

三大忠臣

日傾く影打眺め焼鎌の敏鎌の鎌子奮ひ起ちしも

天津日にかゝれる雲を拂ひ戸の神に代りしためしとや見ん

楠木の末の末葉に至るまで薫らぬ枝はなきもと樹かな

爲朝

矢おもてに誰かは立たん引く弓の強きが中に碎く心の

伊企灘

臀食へとたく伊企灘が雄健びにこきしの膽を破りけんかも

八つ割きに割かば割くべしよしさらば日本男子の臀食へ韓王

臀食へと罵る聲の今も尙は聞ゆる計り響きけるかな

義經

鞍馬山薔の花は一の谷八嶋の外に匂ひぬる哉

西の海の底に赤旗追ひ沈めあたり拂ふて見ゆる白旗

田村鷹

幼な子も慕ふ笑顔に引きかえて怒れる様の猛き君かな

辨慶

薙刀の影ぞ残れる衣川たちながらにも失せにける哉

秀吉

唐土も君が心にくらぶれば小きものとしか見えにけむ

信長

時鳥大ぬる山の一聲に破れぬ雲はなかりける哉

道真

枉罪にかゝるとてしもつくし瀉清き心の世に仰がるゝ

野見宿禰

踏み健ひ當摩の蹶速けり倒し宮の内外もゆるさけんかも

武内宿禰

百歳を重ねて天皇の幾代仕へしいさを高しも

三月三十日江尻にて

所から名も清見瀉漕く舟の波間に三保の松ぞ浮べる

同月三十一日三保の松原小美田邸の門前にて詠める

風早の三保の浦松立ち並ぶ梢に仰ぐ富士の白雪

三月三十一日旅より歸りたるに昨日より母上風邪の心地にましますもさしたる事にあらずと申すになん心許したるに一日夜半に及び遽かに容體變り二日の朝には早や回復の望みなき様になり給ひければ

長くとも筆の命毛限あるや切れゆく先の見ゆる悲しさ

三日の朝燈の消えたるに驚かされ

明け渡る空とも知らず燈火の消へしせつなに胸轟きぬ

三日午前九時四十分と云ふにこと切れ給ひければ

父のみの父のみに母そはの母出でませり淋しや我は

四月三十日郷里福岡に於て立候補を辭し歸京の車中詠める

虎ならば競ふて獲んも鹿狩りのしかも小犬となど争はん
手の内の鹿逐ひ棄てゝ立ち還る後より吠ゆる野良の瘠犬

對米問題

六二
之れをしも忍ぶべきやは國の恥そゝがで止まぬ大和魂

七月十四日の夜詠める

澄みわたる月の鏡を眞綿もて拭ふが如く見ゆる白雲

早

文月の早に門田水涸れて稻葉の露の雫だになし

夕 立

雷の近くなりけり今日はしも遠地の夕立降り來るらしも

九月六日の夜寺内農園に歸る途中

秋の野の夜道を行けば草も木も鳴るかと計り鈴虫の聲

十一月九日庭中の紅葉を眺め

御垣守衛士のたく火のそれならでもゆる計りの庭の紅葉

勅題 山色連天

天地のへたてもわかつ大空の色に浮べる沖つ嶋山

折に觸れて

一日だに思ふことなく爲す事もなくてしあらば安からなむを

大正十四年元旦神前に祈願し奉る歌

天津神國津神たち神はかりすめらが御國幸はひたまへ

我が農園を營める大阪豊能郡小曾根村寺内豊島村長興寺地内は
車の行き通ふべき道もなければ細道七百餘間を取り擴げ新道三
百餘間を作るとて工事に着手せしむる時詠める

古の道は廢れて八重葎茂れる野邊に道作りせむ

人の踏む道はこの道一と筋に作るも人の世の爲にして

電車の音を聞きて

程遠き電車の響き間近くも聞え來にけり小夜更けぬらし

養正義塾を造るとて

踏み迷ふ子等を集へて人の世の眞正の道を教へこそせめ

一月十日丹州綾部なる大本教會に宿り月のすめるを見て

大本の神の宮居に宿りして高天が原の月を見しかな

干 竿

濡れ衣かけては乾く干竿の直ぐなる中に節ぞこもれる

二月十一日は我が誕生の日なるをもて泰榮より祝言寄せければ詠みて遣はす

汝が父の生れし今日ぞ目出たけれ天皇御國のその紀元節

純正普選の爲めに七十餘日惡戰苦闘せる我々同志をねぎらはんとて、那須新溫泉の經營者に案内せられ、四月一日上野驛より頭山翁を初め田中、葛生、川崎、岡、大久保、葦津、小幡、小山田、池田、石原、高橋、高村、平野等打ち連れ那須野ヶ原に至り遊び戯れける折、詠みて同人に示せる歌

何事か那須野が原の集ひとや見る人あらむ我が輩を

人心 如 砂

人心砂のごとくになりゆきて大和嶋根もゆるぎやはせむ

四月十二日寺内農園にて園遊會を催し

思ふどち櫻の本に打集ひ今日を足る日の宴をぞする

櫻

千萬の花は咲けども日の本の色と見ゆるは櫻なりけり

葉 櫻

すがくし花の衣をぬぎすて、常盤の色に並ぶ葉櫻

四月二十七日加藤首相暗殺の嫌疑にて投獄せられ詠めりける
いづこにて見るも同じき夢ながら獄舎と云へば一夜だにうし

天 氣 豫 報

進みたる世とは言へども明日の空の照り降りさへも外づれがちなる

八月十日詠める歌

空に満てる星よりも尙ほ片割れて山の端出づる月ぞ嬉しき

八月十五日夜池田弘君出獄の電報に接して詠める

幾度か踏みにじられて枯れ伏せる草も根に持つ力ありけり

八月二十八日夜寺内庭前の草叢に虫の音を聞きて

鳴く虫の絶えもぞすると八重葎茂れるまゝの草の起きふし

九月二日の夜虫聲を聞き有感

虫けらといやしめられて忍びつゝ鳴けば泣かする音もこそありけれ

九月三日風強く暴風にならんと氣遣はれければ

稻の花今さかりなり天津風心して吹け瑞穂の國中

寺内の農園に養鶏場を造るとて地ならしするに黒龍會支部の人々
毎日炎天下に働きければ

働けば働くまゝの影見えて清くなりぬる草むらの露

述 懷

虫ならば鳴きてのみこそやむべけれ秋は更け行く人の世の中

虫 聲 清

月落ちて虫の音更らに高萩の露より清く澄み渡りけり

二重橋前所見

九重の御橋のほとり眺むれば煙の如くちり立ちのぼる

九重のほとりに高きちり煙り白く積れり寶田の松

九重の御橋のもとにちりたてゝ町の小路は木煉瓦敷けり

九重の御橋の前に天皇の大御寶をつなぐ家見ゆ

十月二十二日武庫郡寶塚の平塚嘉右衛門氏より案内せられ松茸狩を
なして詠める

此處にありそこにもありと松茸を取る手にすがるいはら憎しも

取りさして傘と見えしは雨露の洩るゝ木蔭に立てる松茸

大正十五年一月勅題 河水清

五十鈴川底の玉砂利流れゆりゆり浮ぶかと見ゆる水はも

水清み住まゝしものを玉川の淵瀬におどる春の若香魚

神 助

守ります神の助けのあればこそ我が身安くもなりまさりける
日の守り夜の守りも嚴かに神守ります我ぞ安けき
まがごとを拂ひ清めて八百萬幸はい給ふ神の御恵み

一月十四日伏見の稻荷神社に参詣して

稻荷山いなどは云はじねぎごとの我が身に過ぎし望みなりとも

二月八日葛生東介氏卒然としてみまかられ十二日

雑司ヶ谷の墓地に葬りける時

身は消えぬ残れる骨も又朽ちんくちざるものは君がたましい

初雷を聞いて有感

鳴る神のなりゆく先は知らねども降らずばやまじ夕立の雨

二十二日假寝して

うたゝねの轉た心地ぞよかりける肱を枕にかりの夢路も

述 懷

いつの間に老にけらしな若かりし心に變る事もなき身の
移りゆく世の早ければ老の足おくれたりとや人の見るらん

下鳥繁藏君がスパイ事件をあばきける新聞を讀みて

下鳥の飛び立つ音に驚きて翼縮むる里の蝙蝠

五十一議會のさまを詠める

ひび／＼に日比谷のくさきをいかにせん蛙のいばり糞戸への原

三月十二日奥村具輝君身まかりければ

死出の山打ち越へつゝも見返らむ此世にすめる月のくもれば

四月十四日花の眞盛りに風いたく吹きけるを見て

枝ながら飛ぶかと計り吹く風に散らむともせぬ花の眞盛り

折にふれて

君を忘れ親を忘れて己れのみ小さがりし子のさわになりぬる
政事の本末さへも知らなくに縄ない暮す大臣悲しも

五月二十六日富士の裾野を過ぎり

草青く麥は黄みてゆく春の空に残れる富士の白雪

静岡なる由井正雪の墓に詣で、

謀破れても尙ほ立ち騒ぐ氣色だになく果てしゆかしさ

雲 雀

麥の穂は筆かと計り打ち見えて空にすみ繪の雲雀鳴くなり

來原慶助君より前原一誠傳を贈られければ

萩の露おちて流るゝ五十年尙ほ乾かぬや哀れなりけり

述 懷

己惚れし心悔ゆとも及びなき身の愚かさを知れる今日そも

頭山翁の舊友四十餘年ぶりに翁を見て、少しも昔に變らぬ相貌じや

と言はれしに、僕は子供に髭の生へて居る様なものじやと翁の答へし言
葉のあまりに面白ければ詠める

變らじな幼な心のまゝにして子供にひげの生ひしのみとは

銷 夏 觀 刀

太刀風の音なく鞘を抜き放ち見ればゆ涼し氷の刃

氷なす抜き身の太刀の太刀風に夏も涼しき心地こそすれ

邸内に土俵を築き若者共が毎日相撲へる様の勇々しさに詠める

益良等が取るや相撲の力瘤こめてぞ絞る玉の汗水

老ひたるも若きに返り力足踏み占め相撲ふ様の健氣げさ

流れ出づる汗は土俵の砂にまみれ勝相撲さへ汚れ果てたる

寄りつめて勝と見えしも打ちやられ負けし相撲の面白くこそ

負けと見えし相撲に勝ちて巧みな業のほどこそ現はれにける

四股踏めば地震ふかと隣人怪む程に力こもれる

黒金の身となるまでに打ち鍛ふ道は相撲の外なかりけり
腕節の強むのみかわ心さへ相撲に慣れて動かざらなん

大彦彦國葺の兩將輪韓川を隔て、武埴安彦と戦ひ之を誅す。故に輪韓川を挑み川と呼ぶこととなり、後ち轉化して泉川となりけりとなん聞へければ

挑み川いどみ戦ふ紅いの泉川とはなりにけんかも

八月十八日寺内農園にて詠める

文書けば汗かくことの苦しけれむしろいびきをかくにしかめや

千里山に花火の揚がるを見て

眺むれば千里の山の天空に流るゝ星は花火なりけり

中空の花火は消えて音のみは後れて遠く響き渡れり

八月二十五日養正義塾の建築地鎮祭を行ふ。この日頃毎日午後に至り夕立降りけるより午前中に執り行ふこととせり。然るにこの日に限り午前九時頃大夕立起り大阪市中丈けにて五六箇所も落

雷したる程にて電光凄ましく雷鳴天地を轟かし降雨瀧の如くなりしが。十時祭式を行ふに及び忽然として雨やみ晴れ渡りければ

地鎮めの祭りし居れば地がための神業なすか雨降らすもよ

同夜月の隈なくて蚊帳の内まで照しければ

蚊帳の内隈なく照す月影のさし入る窓はさゝれざりけり

八月二十六日夜詠める

月出て寢屋にや入らむ千里山待つには遠き山の下庵

待ち出でし月は千里の御山より昇りそめたる影のさやけさ

敬神堂比佐祐次郎氏より怪文書事件の歌寄せられければ返しに

大臣さへ補弼の責を知らざるに知らでなす民なにとがむべき

人生の運命ほど奇しきはなし。大正十年父に逝かれし以來不幸打續きて、十一年には兄夫婦十二年には家内の母及び幼少より我が育てし兄の長男を失ひ、又た従兄弟の變死に遇ひ、十三年には母に身まかられ、四ヶ年の内骨肉七人の葬を爲したるが、十四年四

月には己れまでも奇禍に罹りて牢獄に繋がるゝことゝなり、月餘にして保釋せられ、一年有半を経て漸く晴天白日の身となるを得ければ、九月十二日庭に掛け出し棧敷を作り先輩諸友百數十人を招きて祝の宴を張り、鶏汁をすゝり初秋の天空に向つて大なる酒氣を吐き、積日の鬱懷を散するを得たり。歌あり 三首

二度あれば三度ありてふ憂き目をば重ねて見たり七度八度
身にかゝる雲は晴れたり秋の空仰ぎて酌まん友を集ひて
集ひ來しとも喜びの杯に浮びしものは笑顔なりけり

氷川神社に天國作の銚を奉納せんと志せしも折なくて果さざりしが、今年九月十五日秋祭の日に奉納するを得ることゝなり、祭神の式に列なり詠める

御祭の神の御前に御神樂を聞きつゝ居れば心澄みゆく
御祭に神樂かなでゝ太祝詞のらすを聞けば神々しかも

十月二十四日龜岡に出口瑞月師を訪ひて

埋れし跡掘り起し石疊みたゝみ上ぐらん國の大本

十月二十七日養正義塾の上棟式を執り行ひ詠めりける

棟上げし棟木の千木に神留り永久に守ります家は此の家

十一月四日郷里福岡に歸り詠めりける

故郷の人は迎へて喜びぬ若き老ひたる知るも知らぬも
故郷の友と語ればいつしかに幼き折りに立ちかへりけり
故郷は忘れかねつも山川のわかれていよゝ戀しかりける

十二月十三日に至り 聖上の御病狀重らせらるゝを聞きて

九重の葉山の海に波立ちて驚かれぬる年の暮かな

十二月二十五日大阪驛に着し

聖上崩御ましゝけるを聞きて

天なるや月日の如く仰ぎてし我が大君は神去りませり

大行天皇葉山より宮城に還幸せらるゝ寫眞を拜し奉りて

還ります玉の御車出でましに變ればかはる夢の世の中

多年詠み出たる歌を書き集め見て詠める

かきよせてつく／＼見れば和歌の浦拾はん珠の一つだになし

昭和二年正月元日に詠める

國民は百千萬代つき／＼に仕へまつらん君と親とに

海上風靜

硯の海波靜かにて行く船の帆にさへ孕む風なかりけり

正月十三日兵庫縣御影なる奥村治郎一郎君を訪ひ夜更けて寺内の宅に歸る道すがら詠める

御影なる友がり行けば四方山の話に更けし冬の夜の月

風寒み月の光もさすばかり身にしむ夜半に歸る寺内

正月十八日村田虎之助君を天王寺の宅に訪ひ時事を談じ歸るさに詠める

日の本の天の益人ます／＼にまさなん末の世を思ふかな

日の本に八十百國を引き寄せてつなぎ留めなん時にこそあれ

支那人の排外

外つ國の人は人とも思はぬやこの國人の習なりけり

正月十九日福岡に歸る途中戸畑を過ぎて詠める

洞の海に浮べる船は若松の松の林も及ばざりけり

福岡に歸省して

玄海の波荒くとも身をつくし筑紫の國は戀しかりけり

博多灣眺望

千代百道いきの松原玄海の波につゞくや海の中道

昭和二年二月七日 大正天皇の御大葬を拜みまつりて

天地とともに名残を惜みつゝおろがみまつる民のこと／＼

玉敷の多摩の御陵大君を迎へまつるか悲しき行幸

三月七日午後六時半頃丹州方面に大震災起り慘憺たる状況の報ぜられければ

荒金の地は裂かれてゆらくと逃るゝ道もなき地震かな

山は裂け家は倒れて人の身も碎けて飛ぶや血汐うづまく

町なみの家は倒れて燃へ上る煙にむせぶ人の哀れさ

四月一日子供等を伴ひ箱崎の宮に詣で海濱を逍遙して

嬉しさにする子供等兩の手に引連れ遊ぶ箱崎の濱

四月九日福岡西公園を散歩しけるに、平野次郎國臣先生の銅像のほとりは櫻の花に包まれ、恰も先生の、花守せらるゝ如くにて『君が代の安けかりせばかねてより身は花守となりけんものを』と歌はれし御心の實現せられたる觀ありければ詠める

花守となりて居ませる御姿を仰ぐぞ嬉し君が代の春

七月十七日下鳥繁藏君の一周忌に讀める

天かけりいづく行くらん下鳥の羽音は耳に残れるものを

川浪の姉不治の病に罹りければ兵庫縣芦屋に住める甥の宅に迎へ來り如何にもして延命せしめばやと灸治を爲さしめ詠めりける

身をこがす人の誠にさしもぐささしもの病癒へすやはある

八月二十四日詠める

夕涼み衆生歡喜に輝けり風諸共に出でし月影

折にふれて

寺内に木植へ草刈りわれ居れば益良雄さわに集ひくるかも

思ふこと書き綴り居ればうれたくも憤ふろしきことの浮びぬ

新聞を讀みつゝ居れば人の世のあな恐ろしくなりけるかな

九月十六日寺内の宅にて毎夜目さめければ

秋の夜は寐さめがちにぞなりにける鳴くや虫の音夢に通ひて

大國主の命の畫に養を求められければ

八千矛の道をかためて大己貴大國主の神成りませり

觀世音の畫像に贊を求められければ

聞き直し見直し給ひ罪の子等救はせ給へ南無觀世音

折にふれて

御垣守る衛士に問はゞや大内の御山の紅葉色は如何にと

歲暮述懷

荒波に五十歳あまりゆられ來て又た幾灘か越へんとすらん

過 淀 川

淀川は只た名のみにて淀みなく流るゝ如き月日なるかな

寺内にて觀音寺の鐘聲を聞き詠める

年の暮近く聞ゆる鐘の音は胸をつかるゝ心地こそすれ

勅題 山 色 新

動きなき山さへ今朝は新たなる色となりけり春の光に

十二月二十九日大阪出發歸京の際詠める

歸らなんいざ歸らなん年の暮懷寒き東路の空

昭和三年一月十四日朝

今日もまた生れ變りて來し如く新たなる命輝く朝

一月十七日の夜國事を思ひ續けて詠める

我が身をば忘れて物を思へどもつきぬは國の憂ひなりけり

我が國を我身とぞ思ふ心より我身ありとは思はざりけり

なきにしもあらざらまじを我が如く國思ふ人のありやと疑ふ

選 舉

投票の數とり／＼に我こそと競ひ立ちたる候補者多し

選 舉 演 說

選ばれてやがて咲くらん花よりも先に開ける演說の會

戰は早やたけなはとなりにつけり火を吐く氣焰雄健びの聲

滿堂は耳傾けて聲もなく感に絶へたるあり絶へざる人あり

二月二十日選舉開票せられければ

勝軍祝ふ將士は舌戦にうら枯たりし武者聲太し

敗軍の將は語らず黙々と傷く痛手忍べる哀れ

恐るべき議會中心主義の一文を書きて詠める

國を思ふ涙に染し我が文を読む人ありやなきにしもあらず

三月十七日梅花を見て

小さな蕾の中にこもりてや開く花より匂ふ梅が香

五月二十五日午後十一時過ぎ京都基督教青年會館に於て演説を終り直に岐阜に向ひ午前一時四十五分着鍾秀館に宿り長良川の河鹿を聞きて詠める

河鹿鳴く長良の川の水清く聲も流るゝ宿の嬉しさ

貧しげなる老人の坂上に休らへるを見て

老の坂杖つくくも思ふらん登りて安き道もあらなくに

六月二十日寺内住吉神社の森に梟の鳴くを聞きて

住吉の神さびたりし森の中に彌や淋しくもふくろうのなく

かあいげに聞ゆるものをふくろうの鳴くはなかぬにまさる淋しさ

社頭祈願

恵まれぬ人を哀れと神ながら幸はひ給へやなげき聲のむ

蒙以養正

おぼろかに正しき道にはぐゝむや我が肇國の教へなりけり

七月二十六日金澤に着し兼六公園に遊び

去年も來ぬ今年また來て金澤の兼六公園見れどあかぬかも

七月二十七日金澤持明院の蓮を見る。一莖二花なるあり。三花四花五花なるもあり。妙蓮或は瑞蓮と稱する宜なりと謂つべし

一本の莖は岐れて二つ三つ世に珍らしき蓮の花かな

摩訶不思議紅蓮の花の一莖に二つ三つ四つ五つも咲けり

十月五日嚴島神社に詣で

日の本の三つの景色の嚴島波に浮べり宮も鳥居も

嚴島清き濱居に宮柱太敷く建て、神留り在す

嚴島齋き祭れる鳥姬の宮居にしかも集ひける哉

姪の徳子を太守玉主に嫁せしむるとて

末永く太守となれや玉主の玉となる身の徳子孤ならず

十一月十日 御即位式に詠める

尊しや賢所の大前に日嗣の告文宣らしますもよ

十一月十四日奉祝大典

神ながら君と民との和魂にぎ囃しても祝ふ目出度さ

十一月二十一日頭山満翁と龜岡に出口師を訪ひ月宮殿を拜して

黒鐵の鐵の御柱動きなき千引の岩の輝く宮居

此の宮に鎮りまして天地を射照す神の御光仰ぐ

十二月十二日寺内より大阪に行く途上所見

昨日今日見渡す刈田鋤き返し菜種植へたり轉た花思ふ

昭和四年敕題 田家朝

天離る鄙の田中に住む家も豊かに見ゆる朝煙かな

人民の名に於て締結したる不戰條約を慨し詠める

天皇の御國を忘れおほけなく名告るぞ憂たて山杜鵑

頭山翁が政争の様を評して黒き石ばかりを握つて碁を打つて居ると申されければその心を詠める

打ち見れば黒き石のみ握り居りておき惑はする碁にこそありけれ

三月二十七日下阪の途上米原にて起床せしに沿線の梅花咲き盛りたるを見て

梅の花匂へる春に近江路も世をうぐひすは鳴きて過ぎ行く

寺内の農園に紅白の梅花盛りなりければ

咲き出でし紅と白との色はあれど薫は同じ梅の花園

四月六日庭内の櫻咲き初めければ

櫻植へて十年経にけり春毎に見るや嬉しき花の下蔭
年々に枝は榮へて櫻花人の心も春の曙

七日の朝庭前の櫻を眺め

昨日まで蕾みしものを明けぬ間に咲くや櫻の花の曙

八 日

幾度か庭に下り立ち櫻花見れど見れども我あかぬかも

七日雨なりしが九日の今日も又た雨はいたく降り風さへ強かりければ

嫉むにもあらざらましを雨風のさやぐは花の雲とまがへば
櫻花棚引く雲となりしより降る春雨のわりなかりけり

浪 人

浪のごと寄せて碎けて立ち返り力撓ゆまぬ人をこそいへ
静かなる世には鏡となる水も逆捲く浪となれる人そも

浮 浪 人

波の上に浮べる木の葉輕げにも風のまに／＼漂へる人

四月十八日寺内出發の日八重櫻の咲き出でたるを見て
残りなく一重は散りて八重櫻かさね／＼て咲くぞ嬉しき

和 魂

尊しや高天原に神産靈結びて成せる大和魂

天長節の日に詠める

久方の雲井の空に澄む月の影も曇らぬ君が御代かな

武道の天覽あらせらるゝとて選ばれたる慶應義塾の柔道部員等が
猛練習せるを見て

武者の神技なせな賢くも皇尊の見そなはすもよ

五月五日天覽の武道大會にて

打つ太刀の音より高く響きけり雲井の庭に競ふ試合は

大君の御前恐み益良等が柔の試合剛くなりぬる

試合に妙技を現すを見て

大君の御前恐みかゝ呑みし聲思はずも洩しけるかな

六月十八日大和丹波市なる天理教本部に於て二回の講演をなし終りて奈良公園の別院に案内せられ晚餐を供せらるゝ時庭内より三笠山を眺め

夕暮に三笠の山の若草はしかも敷麻の床となすらん

六月二十三日夜行にて新宿驛を發し信州松本に赴きけるが、二十四日子供に遣る繪葉書に

東京を夜汽車に乗りて信濃なる松本驛に今朝着きにけり

松本の待つ人さわに出で迎へ淺間の温泉に案内しにけり

鷹の湯の宿の居間より見渡せば信濃の山々めぐり聳ぎ立つ

歓迎の宴に招かれ

心より歓迎されし嬉しさを包みかねてぞ長く饒舌れり

梅雨らしき雨もなくて夏の來にければ

あつ／＼と云ふ言の葉をくりかへす夏は來にけり梅雨もあらなくに

招 靈 祭

目に見へぬ亡き靈ながら父母の來ますと云へば嬉しかりけり

昨年の夏香櫨園の海水浴場に遊びける折り肥滿せる體軀を示し大に健康を誇りたりし森山吐虹君が一週年の七月二十日身まかりければ野邊送りをなす時詠める

去年の夏君がほこりし言の葉も今日は涙の雨の森山

七月二十七日自動車にて京都より龜岡に赴き老の坂を過ぎりて

老の坂のぼりて行けば山櫻若葉涼しく見えにけるかな

明 智 光 秀

老の坂ふみ違へずば山科の道の露とは消へざらましを

八月五日講演のため泉州岸和田に赴き七日春木の海濱にて網引を見せられ

網引きする海人の聲々勇ましく躍れる魚の輝く渚

八月六日春木町正性寺にて講演をなし

小波の岸和田續き春木町言葉の花を咲かせてしかな

ツエツベリン飛行船の一氣に西歐より飛來せるを見て

さながらに神世の業を眼のあたり天の鳥船飛び來たる見ゆ

飛行船にて太平洋を横斷するを見て

日の本ゆ亞米利加かけて綿積の波の空行く鳥の飛び船

八月廿六日寺内農園にて

天離る鄙に住む身は荒金の地におきふし親まれけり

平岩佐介君養正義塾の教子を伴ひ紀大の兩國を普く無錢旅行せりとて物語りせられければ

紀の國の木にも草にもおく露の情に宿り旅もせし哉

大和めぐり大和よく見て大和心動かでありし山川草木も

九月八日信州國民黨諏訪支部演說會に招かれ岡谷に到り出迎の黨員に詠みて示す

諸共に諏訪の湖淺間山火水となりて戦はんかも

信濃なる淺間が岳に燃ゆる火の火より明るき國となしてん

姥捨の山はものかは町の中に親さへ捨つる人もある世に

九月十日東京より竹崎千代子家内及び佐橋高村等の黒龍會同人を伴ひ諏訪に來り余を案内して天龍峽に遊ぶ。數日來の降雨に河流の増水二十餘尺に及び壯觀極りなし。黒龍會於天龍峽、忽見増水二十尺、雨晴月出星南流、天時地利人事宜と詩にあらず句にあらぬ感想を吟じ、又た歌を詠じて記念となす

石折くの神業にこそ關けゝん天龍峽の奇しき流れに

水面より百數十尺の高地に在る仙峽閣に宿り

水の音聳ぎ立つ岸に上り來ぬ天龍峽の雨の流れは
龍角の峯より見れば天龍の跳る流れに驚かれぬる

九月二日寺内にて詠める歌

聞くからに鳴く音清くも天地の心知らるゝ鈴虫の聲

言 志

心さす方は遠くも海の外に八十綱かけて國引せんかな
バイカルの湖より割けて東の西比利亞早やも動けるものを

九月二十一日小幡虎太郎君の母堂身まかれたりとの電話ありければ我も同じ歎きせしことの年を経て又た涙を誘はるゝになん詠める

我れも見つ夢かとはかり打ち歎き面影のみぞ目には浮びし
打ち歎き返らぬとても垂乳根の親に別れてなげかざらめや

九月二十六日雨降り夜に入るも尙ほやます此の日友人小川平吉君

嫌疑を以て檢事廷に召喚せられ遂に收監の身となりたりと聞こへければ

降りかゝる雨に哀れを添へつゝも小川の流れ如何にかなるらむ
さらぬだに物憂きものを秋の夜の獄の中の人の心は
潔く守るとはせで戰の糧を求めて道や違へし

九月二十九日拂曉突如として田中義一君他界せられたりと聞こえければ感傷に絶へず詠める

散り／＼に散り行くものは秋風に木葉のみとは見られざりけり
去年の秋諫めて去りし我ながら君が今日こそ轉た悲しき
輝きし星の光は曉の青山に落ちて鳥鳴き騒ぐ

十月二日神宮遷御の日午前八時より養正義塾生徒一同を講堂に集め伊勢大廟に關する講演をなし終つて祝詞を奏し謹んで遙拜しける時詠める

教子に皇祖の神の古事を語り聞かせて後ち拜みぬ
神風の伊勢の宮居を遙かにも拜がむ生徒の身を祈るかな

神宮遷御の日大阪地方は曇りたりしが午後より雨降り出でたり神
風の伊勢の山田も雨ならんと思はるゝ節ありければ詠める
汚れたる人さわに集ひまつろへば天照す神も曇りますらむ

十月四日教へ子共に日米衝突の免かる可からざる原因あるを説き
聞かせ

曇りなき日の本なれど横しまに降り来る雨のなからましやは

十月五日所感

心いため身をくるしめて安き日のなきが中にも生ける樂

十月八日新月を見て

今日もまた靜かに暮れて新たなる光を仰ぐ三か月の影

夜半に目醒めて

ふと目ざめねられぬまゝに物思ひ居れば曉遠く二時の鐘鳴る

十月九日所感

日に日々に若き血潮は失せ行くも此の身すごやかに心は老ひす

現代の科學が進歩したりと稱するも僅かに天地自然の造物を應用
するに過ぎず未だ生成の功を顯はす能はざれば

草一葉髪の毛一筋作り得ぬ人の科學の哀れなるかな

十月九日我が生徒の柔道紅白勝負を見て

業のみか負けじ魂現はれて見るも勇々しき勝負なりけり

十月十八日東武線須影にて停車場の垣根にコスモスの花盛りなる
を見て

コスモスの咲き盛りたる花垣の須影嬉しき所なりけり

足尾銅山にて

そゝり立つ足尾の山の下つ岩根掘れども盡きぬ寶ありけり

谷川の底に潜める大河鹿とらばやとらむ岩裂き根裂き

九六

十月十九日足尾なる山の神嶺山に於て佐橋道隆君急死の電報に接し歸京の車中詠める

一昨日が永き別れとならんとは君も知らじな我も思はず
惜しみても餘りありけり我が後を繼ぐべき教子先に逝きしは
幾度か身を輕んじて戦ひし君が武者振り目にこそ残れ
師を思ふ誠心うれしいつもく影身に添ひて我れを護りし

道隆君の初七日になりければ

失せしとは尙ほ思ほへす夢のごと早や初七日の祭りとなりぬ
祭る我祭らるゝ君と變りなき心一つに國を護らむ

十月十七日藤林家の祝宴に列り清水正徳翁の鼓を聞き妙技神に入りて感に堪へざりければ詠める

いみじくも鼓はさえて久方の天の岩くら打ち開くらむ

十月二十六日伊藤博文公の二十年祭に當り往事を追懷して詠める

韓大和一つ心になり初めし其の政事なせし君はも

韓皇讓位せられ太子即位の際暴動起り危険甚だしき中を參内せられたる伊藤公の英風を懷ひて

猛ける民荒ぶる町を事もなげに行ける威風の忍ばるゝ哉

萬世に死せざる命持てる公隱り身まして早や二十年

公のこと明かにして潔よき政事なす人なき悲み

今の大臣品降れりと見る我は公がありし世知ればなりけり

公我れを見る目は高く我れ公を見る目及ばぬ身の若かりし

十一月四日能樂を催したる折には未だ青かりし庭の紅葉も僅かの日數を経たる今日は既に紅を染め出しければ

梢のみやゝ色つきて青かりし葉もあやなくに紅葉しにけり

勅題 海邊の巖

九七

打ち寄する常夜の浪の力にも動かぬものは巖なりけり
絶へ間なく寄せ来る浪の攻め鼓打てど巖の動くものかは

十一月十五日大阪より頭山翁末永節君等と出雲大社に詣でんとて
五時に起き八時の汽車におくれじと寺内出で、梅田に向ふ
夕暮に三朝の温泉に到着し岩崎旅館に入りて泊りぬ

十一月十六日倉吉の有志一同の催しにて、打吹公園有親館に於て
頭山翁初め我々一行の歓迎會を開き盛大なる宴を張られたるが、
時しも満月曇りなく一天に輝き渡りければ

頭山の満つる月影曇りなく秋もあかれぬ旅もする哉

十一月十八日松江市皆美館より風景を眺め

老もまた若やぐばかり嫁が嶋ながめ見あかぬ景色なりけり

昭和五年元旦明治神宮に参拜して

夥だしあなおびたゞし神徳を仰ぐ代々木の宮の人波

皇孫の知ろし召す世に幸あれと明治の宮にかしこみ祈る

正月二日兼てものをける大日本國體々系圖講義録を書き初むる
とて詠める

なか／＼に筆も及ばぬ國の華書くは書かぬにまさるなるらむ

正月五日宿病の手術をなし十一日詠めりける

いたつきに我れ臥し居ればうからやから死ぬるばかりに騒ぎけるかな

宅野田夫君より美人畫を贈られ視力衰へたる眼にも筆意の非凡な
るを認められければ

たをやめの姿にこもる心さへ書き現はして見ゆるものかな

一月二十三日詠める

二十日ばかり病み臥し居れば世の中も身の廻りさへ忘れ勝なる

一月二十七日述懐

生死は神のまに／＼任せつゝ此の身病むともなにをかなさん

一月二十八日庭内の梅花盛なるに雨のいたく降りければ
梅が香も流れて水となるまでに降りそゞぎたる今日の雨かな

一月二十九日詠みける

病み臥すも千々に心の働きてまどろむ外に氣休めはなし
まどろめば夢か眞か人心安からぬ世の様を見る哉

一月三十一日初めて物の香の鼻に入り食事も進みそめければ
このめさへ見へぬ春ぞとかこつ身のはなに香ぞする今日の嬉しさ

二月三日轉地療養に赴かんとして

都出て病める身靜かに養はん行衛や何處伊豆の湯が原

湯河原清香園に隱棲し

山に入り雲に隠れし身ながらも浮世の事は距てざりけり

湯河原温泉は陝谷地にして中を流るゝ小川を藤木川と呼ぶ。右岸
は伊豆國左岸は相模國なりと聞き

藤木川細き流れも伊豆相模國押し分けて海に入りけり

伊豆相模國名考の歌

山は裂け沸き立つ水の奇しき業かしこみ巖の國と云ひけむ

岩が根の岸も陸地も相摸洋大浪たちてさかみさかみし

明石大將の達磨に一喝天地震動一棒須彌粉碎の自畫賛せる幅物湯
河原清香園の我が居室に掛けられ在るを見て故友を憶ふの情に堪
へず

天地を動かす動たておきて本來空に歸せし君はも

二月六日東京は降雪甚だしかりし由なるに草野夫婦池田弘藤二雄
西郷隆秀白井爲雄等つぎに我が病を問ひ來りければ

湯が原の湯氣立つ宿に都路の雪踏み分けて來る人嬉し

二月七日昨日來の客はつぎに歸り安藤照子小久江成子姉妹來
訪しければ

歸る友來る友送り迎へつゝつれづれもなき温泉の宿

二月八日午後三時頃東京より娘の來りければ

午前より今か／＼と待ち詫びし年恵來れり高村附き添ひ
病める父問ひ來て喜ぶ娘より子の顔見しが嬉しき親心

二月九日大風吹き荒みければ

家動き障子は震ひ部屋の中驚かれぬる大暴風かな

九日山里尙行氏足尾銅山の調査書を携へ來り懇ろに説明せられければ

山中に山里の來て懇ろに足尾の山々説き明しけり

二月十日妻子を引き連れ入浴に來よと勧めおきし葛生能久君親子
三人來着しければ

蝸牛家を舉りて來りけり葛生の若葉古葉諸共

二月十二日相州湯河原より國府津を経て郷里福岡に赴く車中にて
詠める

富士か峯の麓に立てる足柄も裾野となりて見ゆる白雪

富士が嶺ゆ足柄箱根打ち連ね降り續きたる雪の白妙

二月十七日志賀の宮に詣で

沖つ波海の中道分け行けば龍の宮居の志賀の神島

二月十九日簡牛凡夫君の選舉應援の歸路山陽線の車中にて發
病しければ

鹿を逐ふ狩野の露も身を厭ふ違だになく病みし我はも

三月三日寺内農園に臥床し靜養中風雨烈しかりければ
降る雨に力を添へて吹くやらむ空にうなれる風の烈しさ

三月六日病床にて

二月月の永煩ひにさしも我が鍛ひし骨身やせ衰えぬ
衰えし身にも力の残るやと三尺の太刀振り試みぬ
あな嬉しやせ細りたる腕にも太刀振る力尙は餘りあり

寺内なる岸龍山觀音寺の境内荒蕪に歸せるを見て村人を語らひ木
竹を刈り拂ひ櫻楓を植え付け詣で來る人々の目をも喜ばしめんと

企て工事に着手しける時詠める

生ひ茂る御山の竹木苅り拂ひ大慈大悲の光仰がむ
櫻植え楓を植えて春秋の景色を添へむ観音寺の山
村人の老も若きも打ち集ひ大慈大悲の勤をぞする
これよりは詣で來よかし人さわに導き給へ南無觀世音

岸龍山の老松

久方の天の鳥船飛び來りつなぎ留めけむ岸龍の松

病後の運動にと木竹を採り來り毎日杖を作りて楽しみけるがふと
思ひ起すことありて

病みて早や轉びし後に杖を作りこは何事と自ら笑ふ

鴨の首に似たる杖を作り

鳩杖はいとも賢し鴨杖をつきて遊ばん野に老ひし我

龍頭に似たる杖を作り

人中にたつの頭の杖を作り鞭ともなして世に振はなん

杖 術

杖は突き撃つのみならず張り押へ繰る術もあり心のまゝに

櫻花國人

日の本の開けし時ゆ櫻花人の心となりにけんかも

鉢の木櫻

切りくべて薪ともせで鉢の木の櫻咲く日となりにける哉
鉢の木の櫻を床におきたりしが散り初めたるを見て

床の間におきし鉢の木散り初めて疊かけても積る花瓣

惜 花

飽かざりし心今年も飽き足らで散るこそ惜しき櫻なりけり

菜の花

見渡せば果てなきまでに花簾敷き列ねたる大野の菜畑

磯部香夢なる人より還暦の歌を乞はれ詠みて遣はす

荒き風狂へる浪も凌ぎ來て磯部の松は若返りけむ

中西六三郎君の長逝を悼み

國を憂ふ心は燃へて火の如き君が熱辯又聞くを得ず

大日本生産黨を創立せんとて詠める二首

國を生み人を産ませし神業に神習ひして世を救はゞや

生み産みて萬づの物を育くまば足らはぬことのなにあるべしや

折に觸れて

大和魂失ひ初めて日の本の國の光は薄らぎ行くも

五月三十一日夜半過ぎに地震のしければ

破れ壁に張りし紙さへつん裂きて家鳴り激しき地震しにけり

狂歌の部

浦汐斯德にて歌會の催されける時題に應じて詠める
言語不通戀

契らむと思ふ妻木はありながら言ひよるすべも口なしの花

明治三十年西比利亞旅行中イルクーツクより叔父に贈る手紙の末
に

此處迄はたどり來つれど金もなし仕方もなくてイルクーツク哉

大垣を過ぎ懷古

徳川の流れをここに堰きかねて先づ大垣のくづれ初めけり

明治三十五年十二月十六日京都より北織某押かけ來り負債の催促
急なりければ戯れに家人に示す

忘れても内田と云ふなうるさくも借金取りのふいと北織

明治四十年十一月二十三日京城を出で地方自衛團組織の爲め一進會長李容九君等と旅行しける時、華溪寺に泊りしが、一行中の武田範之和尙寢酒を得ず終夜苦悶をなさざるを見て戯れに詠める
酒なくて旅の疲れも山寺に十願九倒半死半生

蓋し十願九倒とは之れより先き李完用が宣諭使を地方に派遣して暴徒を平治せしめんとせしに、却て暴徒の爲に要撃せられ、宣諭使は馬より落ち十願九倒して逃れたりと一進會地方支部より報告ありたるより一行中の流行言葉となりしなり

十一月三十日連川にて一進會の壯士が燈火をつけて我が宿舍の歩哨に立てるを見ておかしさに堪へず詠める

風前に燈火をつけ我々の命歩哨の心細さよ

京城北部齊洞に居宅を構へ大和町の官舎より引き移り詠めりける

御歌同感

我庵は北岳つゞき町近く倭城南山椽先きに見ゆ

奇仙鳳士

我庵は城内一と眼に見渡せば世に絶景と人は言ふなり

二城の隠狸

我庵は霞に見へぬ山の上よ人こそ訪はね遊ぶまもなし

四十一年十一月廿六日大風吹き暴み家根を飛ばしければ
騷擾戰場

天津風とたんの家根を吹きとるなおらが世帯をししばし留めん

皆本の安家

吹く風を何のそのとは思へども家根も地に飛ぶ大暴風かな

四十一年十二月十七日詠める

借金の方々峰々重りて利子さへ高くなりける哉

鐵砲の玉より早き光陰にとんとん年を酉の正月

右の狂歌を蟻生十郎君に贈りければ君の返しに

かけとりにいぢめられつゝ今年またなく／＼歳を酉の正月

十二月二十九日迎春の準備も整はざれば負け惜みに

松飾り心にてたてゝ世の春を我のみ一人しめ縄にせむ

四十二年正月二日竹下篤次郎君來訪せられけれども留守と唱へ面
會せざりければ寄せられたる歌

門に松主は居そうに庭の梅目出度竹はゝる出にけり

返しに

芝の戸を閉ざして留守を遣へども内田と訪ふぞおかしかりけり

宮崎寅藏君が甥築地房雄なるもの京城にて車屋を営むとて年の暮
に其資金を乞ひければ、要求の半額を渡し置たるに一月十二日残
額支拂の期日過ぎたりとて急を訴へければ、自身及び妻と井上藤
三郎三人所持の時計を質に投じ漸く調金して與へける時詠める

時計をも賭けて築地の車屋は何時か質草引き出すらむ

小田原の親戚を訪ひけるに途中汽車の故障ありて夜更に到着しあ
まつさへ在家の町名を誤り同行の妻と行きなやみければ詠める

小田原の評議まち／＼探せども在家はとんと沖津白波

偶感

赤恥を柿のみばかりなり下り木葉微塵の秋の夕暮

借金

七重八重腰は折りても山吹の黄金ばかりは貸す人のなき

戌の歳の春を迎へて

尾を振つて來たがどうやらわん／＼と噛み合ひそうな犬の歲かな

亥の歳を迎へ

狩り犬に追ひ出されて深山より大亥の歳の春は來にけり

劍友清水潔君佐倉より歌寄せられければ返しに

肌寒き太刀風もなくこの頃は額の汗を拭ふ計りぞ

新聞記事の墮落せる様を見て

新聞は音楽舞蹈間夫の種を拾ふて食ふて居る氣か

新聞の記事は盗人々殺しよくも運動殺つぶし種

昭和二年正月元日に詠める

諒闇に改まつたる挨拶は何んと昭和の御代の初春

五十四歳を迎へて

今まではろくでもなしと思ひしに六九五十の四とはなりけり

時 事

政界の水は濁れど我が足を洗ふ様なる人も内閣

小久江成子より三十六歳も暮れ行くと云ひ寄こしければ

六々と暮れ行く年もなんのその四十島田はまだ遠からむ

安藤照子より『きつと来る春と思へば何のその庭先の梅も笑ふとて紅をさし』との歌寄こしければ

きつと来る春と冬の真中に立つても居てもいられざりけり

庭先の梅も笑ふて居るならむ鶯と聞く懸けとりの聲

何んのその首でもやるに借金のかたにはならぬ顔の持ち主

昭和三年の春袴垂の演劇を見て

袴垂次は熊阪石川の末は眞砂か胡麻の灰ども

同三年五月臨時議會の醜狀を見て

罐詰めの腐れ議員も選良と言ひ値で通る臭議院かな

同三年十月廣島にて松浦泰次郎氏の比治山下段原別荘に宿り

御馳走に腹はだん／＼段原で比治山枕眠る別荘

歳 暮

九々算もおしつまりたる年の暮七八置いて五十六春

昭和四年一月十六日親友川崎三郎氏の令嬢婚嫁の媒酌人となりしが、甲州南都留郡谷村町の式場にて舊知鈴木忠兵衛氏に逢ひ同氏等發起して富士山麓巡りの電鐵敷設中なるを聞き

梓弓引くや都留郡や村町通す力は富士の山まで

山田七平君の姓名を読み込み示す

山田守る案山子の弓も七に置き平たくなつて居るや居らずや

同四年六月二十四日信州松本にて頻りに揮毫を乞はれければ

悪筆も請はるゝまゝになぐりつけ恥を天下に書き残しけり

千摺を書くよりましと筆執れば皆喜びて珍寶となす

村山節南氏より國難歌の長詩に國なまりの言葉にて作れる狂歌を送り越されければ返しに

金玉は有るかなしやの禪も餘り絞むれば氣絶するたい

財政緊縮

マ―ヨカタイ綱紀肅清濱口の聲ばかりでも少し雄幸

綱紀肅正

政黨にとつた金なら返さずもよさそうかんと人は言ひよる

朝鮮を昔の韓にせんとてや賣官賄賂とつてそとく

鯛生金山株の賣買問題に就き幾度か失敗しけれども飽迄成功せしめんとする椎葉紉義君に示す

手違ひは椎葉々々なれど鯛生を首尾よくとつて賣れば紉義

昭和五年の元旦を迎へ我は五十七歳妻は四十八歳となり死に目に近づき來り越し方を顧みれば遠くなる身の濱千鳥鳴いても追付かず笑ふて暮すにしかずと目出度謡ひ出でける

爺となり婆々となる身の御正月笑顔にしはのみち筋ぞ知る

同五年一月五日稻見光博士に鼻茸の手術を受くるとて

身を切るも鼻たけなれば穴賢鼻糞ほども苦しからまし

醫者なれば稻見もせずに切らせなん鼻たけなりと云ふと雖も

雜詠の部

興亞の歌

明治四十五年四月作

一

亞細亞の大陸見渡す限り
日出る東海豊葦原の
君は聖明臣下は忠義

國と云ふべき國とてないが
中つ國こそ萬世無窮
義膽に堅めし國家でゐる

二

臺灣樺太朝鮮までも
起し建てたや同文同種
助け堅めて堅めて助け

擴げし日本のその旗の手に
四百餘州の大民國を
亞細亞の聯邦造ろじやないか

三

歐米諸國の古強者は
今や長江黃河のほとり
いでや日東男子の腕を

烏拉爾ヒマラヤ打ち越へ來り
馬に水飼ふ傍若無人
ふるひて起さん亞細亞の國を

平和の旗風

我が日の本は昔へゆ
朝日に匂ふ山櫻
強きを挫く荒魂
沸き立つ血汐東海の
見よや歐米諸國の士
五洲の山河風靡せん

世界の開化に先達ちて
大和心の和魂
傳へて此に幾萬年
日出づる色に現はせり
真正の道を押し啓き
平和の旗は天照す

神の御末の人の手に
堅く握りてありけるよ

堅く握りて在りけるよ

健兒社

第一節

慷慨國を憂ふれば
浮びて燈火ほの暗く

今古の興亡眼中に
血淚滂沱健兒の社

第二節

丹心國に報ひんと
斬馬の利劍振ふ時

水火辭せざる大丈夫が
易水寒し健兒の社

第三節

世間滔々怪ます
問はで置くべき膺懲の

賣國思想の大逆罪
鐵腕鳴るよ健兒の社

第四節

人に益なき空想や
棄てゝ眞如の實相を

空理空論腐儒の學
とらへて起てる健兒の社

第五節

太平洋に吹きすさむ
金甌無缺の櫻花國

狂風怒濤打ち静め
花とかざさん健兒の社

時間の問題

(口語詩)

利口そうな顔して
人間の生死が
神の手
賢愚強弱
平等もなければ
時間の問題だ

如何に智恵絞つても
宇宙の大秘密
公開されぬ以上
高の知れた差別よ
差別も無い
朝たに紅顔

夕に白骨 穴賢 南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

もがく人

ざんげを書いて 新らしきざんげの種を
作つて居る人 死線を越えて
己れが高い處へ 上りたい人
もがくはもがくは もがいてもがいて
奈落へ墮るであらふ 識者は淋しい顔して
彼等を見て居る 謳歌者はやい／＼と
騒いで居る

戀

馥郁と鼻に入る 香の薫り

惚忽と耳に感ずる 音樂の響き
人間を戀に導く 戀に理屈はない
菜の花の プーンとする
蝶が狂ふ 琴の音がする
犬がウオーと 長くうなり出す
何んとな く すいたらしい感じ
戀か即ち戀

戌の歳の男

戌の歳は來にけり 戌はわが干支にぞありける
それかあらぬか 耳も目も鋭感にして
透き通る様に 先きの先まで見へる

一寸先きは 暗の世の中に
 歩行いて居る人が 如何にも危なかしい
 ワン／＼と吠へて 噛み付きそうな
 勢を見せ 教へてやつても
 解せぬものは 恐れるやら
 嫌ふやらして 打ち叩きもする
 叩かれながら 家に盗人國に仇
 防ぐ本能は 死を以て守つて居る

憤 憤
 我が憤は 火山の如く鳴動し
 抑ゆれば 抑ゆるほど
 強く破裂する 熔岩の迸る處

青山も焼け爛れ 枯山とならん
 空に飛ぶ灰 何處までか行く
 田も畑も埋れん 我が憤の積るほど

泣

泣きいざち あらびにあらび
 あらびなば 泣きやとまらん
 なか 泣くや
 山川草木 皆な泣けり
 泣く聲は 九天に響き
 天つ神ぞ 聞こし召さなん

大隈侯が重態に陥れたりと聞きて

百二十五歳まで 生きる と唱へた

大隈さんは百二十五まで
生かして置きたい
あの該博な
あの無邪氣な
あの雄辯な
あの英雄漢
英雄頭を回せば
神仙であるのである

旭光照波

眞紅の大球が海面に浮ぶ
女波男波が生き／＼となつて
輝き渡る潮吹く鯨
烟吐く船飛び上る鷗
眼の限り空も海も
喜びの色に漂ふ旭日の光り

昭和三年衆議院議員總選舉に臨み白骨の文
に擬して作れる選舉文

夫れ選舉の至難なる様をつらく考ふるに、凡そ議員なるものは國民の代表にして、
四ヶ年が一期なり。去れば未だ萬代の代議士あることを聞かず。一期過ぎやすし、誰
か百年の代表を保つべきや。我れや先き人や先、選舉に落選するものは、本の雫末の
露よりも多しと云へり。されば今期に當選するも、來期には落選する身なり。既に解
散の風來りぬれば、上下の議院忽ち閉ち、昨日の威勢消え失せぬれば、後悔空しく先
に立たず。選舉費用さへ盡きぬる時は、黨員同志寄り集りて智恵を絞ると雖も、更に
其のかひある可からず、扱てしもあるべき事ならねばとて、候補の名告を挙げ、日夜
の運動なし果てぬれば、只た借金のみぞ残れる。哀れと云ふもなか／＼愚なり。され
ば議員の不定なる、どうせ浮沈の境なれば、誰れの人も早く、選舉の一大事を心にか
けて、選舉民を深く頼み參らせ、信用受くるべきものなり。穴賢こく

選挙の歌

- 一、今日は天下の有権者 選挙投票千餘萬
積んで登るは誰々ぞ マラソン競走競ひ勝ち
- 二、よし最高に達せずも 當選すれば選良の
任は重くて道遠く 治國安民肩にあり
- 三、若しも落選する時は 次期の選挙を待つ計り
代議政治の圏外に 立ちてくよ／＼國のため

政黨の歌

- 一、政友強力民政は 智能犯だと人は云ふ
言ふことなかれ政黨の 費用はどこから出るのかい
- 二、勞働農民々衆は 洋魂和體の社會黨
小作爭議やストライキ 中の血を吸ふサナダ虫

- 三、どうせ録でもない政黨 出来た始末を如何にせん

昭和の御代の一新は 政黨撲滅手初めよ

孤

兒

大正十二年十一月作

一
恐い地震にころがされ、大きな火の玉飛んで来る。火の子に逐はれて迷ひ子に、な
つて仕舞つて悲しむよ

二

父様母様火の中に、私は人に助けられ、天にも地にも一人もの、涙で先は見えませぬ

虫づくし

大正十四年十月

秋をまつ虫鈴虫に、枯れ行く色の草雲雀、馬追ひ虫やくつわ虫、武夫共がきり／＼す、
鐘たゝき虫かんたんの、夢となりけり虫の聲

秋

大正十三年九月七日

なけく虫よ虫よなけ。汝がなく聲に秋は来る。くるく秋の淋しさに、我れも泣かなん聲あげて

夏

大正十四年七月作

あつくあつや汗が出る。出る汗しばつて田を作り、つくりし稻の延びくと、のびゆく見れば風涼し

雲雀の母さん

昭和二年一月三十日作

一

雲雀の母さんどこいきやる。古巢をぬけてどこいきやる。可愛い子供を残しおき、青い御空の果もなく

二

雲雀の母さんどこいきやる。飛んで山越へ雲に入り、雲の八雲の中空に、子供の土産があるかいな

三

雲雀の母さんなせなきやる。巢籠る子供が親戀し、戀し戀しと泣く聲に、心引かれて泣くわいな

神 風

石疊み、重ねて寄せ来る仇浪。いで防がん、もんだりくくりの強者共。山なす軍船漕ぎつらね、波間も見えず能古志賀の、沖より擧ぐるときの聲、海山一度に震動し、大和島根も崩るゝか、あなおびたゞしの軍勢やな。思ひぞ出づる文永の、時しも不意に對馬瀉、壹岐とて残る人もなく、討ち破られて身を筑紫、心碎きし元寇の、今又た此に襲ひ来る、弓矢八幡箱崎の、神の御前に敵國を、降服せしめ申さんと、勇む夕の大あらし、吹くや荒津の濱邊より、かち渡らるゝ海の上、浮ぶ骸の十餘萬、生きて還すは神風を、三人なりけり弘安の、神風こそは目出度けれ

斥候

明治三十八年三月作

天津日の光さへぎる荒鷺の
腰に取り佩き立ち出づる
吹雪うづまく只中を
我が斥候は敵陣に
あたりの容子窺へば
胡馬北風に嘶きて
軍敗れて驍行かず
只だ悵然たる計りなり
かへり告ぐれば夜をこめて
さ霧を分けて進軍の

翼そがんと劒太刀
面を拂ふ長白の
物ともせざる大丈夫の
よるや木蔭に身を潜め
弓張月の影淡く
左しちに猛きコザツクも
驍の鬣かい撫でゝ
斥候是を見るよりも
眞神友よぶ曉の
喇叭を高く奏しけり

義士の本懐

大正元年十月作

夜ぞ寒く成り増りけれ唐衣
主の仇なる吉良殿を
恨みに磨く腰刀
沸へにぞ沸へて稻妻の
鎬をけづり鐔を割る
赤穂浪士も仇敵を
亡君泉下の妄執を
消えて厭はぬ身ながらも
吉良の邸を窺ひける
面に漆し丹を飲み

打つに心の急がるゝ
やわかこのまゝ置くべきと
匂ひは深く亂れ刃の
光りもすぎき太刀風に
打ち物業に名を得たる
撃ち洩らしなんことあらば
晴らす由なく泡雪の
静かに時を松坂町
四十七士の輩が
つぶさに嘗むるうき艱難

心碎きし甲斐ありて
とけて嬉しき雪景色
昇る朝日の影添へて
忠臣義士の本懷を

積り積りし怨さへ
血しはの色にはのくと
泉岳寺へぞ引き揚げける
聞くも語るも涙なり

同天の偉業

大正元年十月作

雨霰篠を衝くとも笠城山、君の御袖を濡さじと、枝をかざせる楠の、赤坂城を七重八重、攻め圍みたる賊軍の、膽を冷せし釣堀や、熱湯注ぐ軍略の、智謀の程こそ類ひなき、忠心義心の深緑、茂る谷間の泉より、流れ出でけん菊水の、旗風四海を動かして、やがて沈みし天日を、回す偉勳も時未だ、到らぬ用意の兵糧に、是非なく城を立ち退きて、再び義兵を金剛山、千早の城に挙げ給ふ、賊將共の驚きは、死せる孔明仲達を奔らせしにも彌まして、死せりと思ひし正成が、又生き返り千早振る。神代も聞かぬ

謀計に、寄手の大軍氣を吞まれ、力もつきて峯の雲、眺めて日をぞ送りける、かゝる所に勤王の、兵の諸國に起り立ち、北條高時初めとし、一門の輩悉く、撃ち亡ぼして果てければ、昔に復る中興の、建武の御代となりにけり。

平野次郎國臣

昭和二年九月二十九日作

魁けて心筑紫の飛梅や、匂ふ東風福岡の、舞鶴岳に巢籠れる、平野次郎國臣は、勤王討幕の大望を、胸に秘めつゝ表面には、烏帽子直衣劔太刀、身に取り佩きて悠々と、月雪花の折しげく、笛吹き鳴らし歌を読み、そゞろ歩行きの異様さに、世人は眼を聳だてつ、次郎ほどの大丈夫も、養家に残せし恩愛の、羈絆に心狂ひけん、哀れ笑止の有様やと、言はぬものこそなかりける。時こそ來ぬと國臣は、窃かに國を脱走し、都に上りいつしかに、其誠忠の現はれて、勿躰なくも九重の、雲井の上に聞こしめし、破格の拜謁賜ひける。あな尊しや冥加やと、感涙自らとどめかね、やはか復古の大業を爲さでやまじと同天の、管貝策は立てながら、施す術も荒磯の、風にもまれて薩摩潟、沖の波

間に友千鳥、一人は消えて一人のみ、助け歸りし國臣が、心の中こそ如何ならむ。やがて神武必勝論、書き著して「我が胸の燃ゆる思にくらぶれば煙は薄し櫻島山」山の木蔭にやすらひて花待ち顔なる久光に、頼みの手綱繫がれず、隙行く駒のいとをしく、平尾の山の草の庵、結べる同志おとのへば、折ふし野村望東尼は枝折戸閉ざしてあらざれば、矢立て取り出し「松風のたゆるばかりはあらねどもしばしは音の遠ざかるらむ」別れの言葉木の端に、書き残してぞ去られける。後より望東尼歸り來て、平野の住家訪ねしも、居合さざれば「松風のたゆるばかりはあらずとも音のみ聞きて遠ざかるうさ」逢はで別れの本意なさを、かちこちとして残されぬ。さればにや次郎國臣は、平尾の山の庵より、かしま立ちすと旅装ひ、打ち整へて立ち寄れば、望東嬉び出で迎へ永の月日「埋れつる日蔭のかつら雲居までのぼる初めぞ嬉しかりける」心は歌に盡されず、國臣笑をたゝへつゝ、反し歌とて「海山に潜みし龍も時を得て今は雲居をかけて、こそ行け」行くは御國の大事ぞと、勇み進んで見へにけり。望東つくづく「嬉しさと

別れ惜しさと如何なれば一つ心に思ひわくらん」わくよしもなき別れ路に、別れ惜しめば國臣は、世にも人にも「忍びつゝ旅立ちをむる今宵とて山かけ深き宿りをぞする」宿の情を喜びぬ、望東又もや「一と筋にあかき道行く中宿にかして嬉しき山のあれ庵」語りあかして東明の、曉き方に國臣が、いとも身輕き出で立ちに、心さわぎて望東は名残惜しさに「惜からぬ命ながれ櫻花雲居に咲かむ春を見るべく」言葉つくして沁々と後ろ姿の見ゆる迄、さすが女性の「遠ざかる影を見送る小山田の稻葉の露も涙顔なる」口吟みしてこれや此の、行くも留るも今生の別れとこそはなりにける。

白河殿の矢風

明治四十五年五月作

夫れ天に二日なく、地に二王なしと雖も、勅命院宣二つながら畏し。此に源平兩家の
大將だち、思ひたつかの弓取りて、絞る涙は敵味方、親子兄弟立ち別れ、生死の程も
白河の、御殿に參せし人々は、六條判官源の爲義を初めとし、君達數多附き添ひ給

ひ、四方の門をぞ堅めける、偕も寄せ手の大將として、左馬頭源の義朝承り、之に従ふ軍兵は親打たるれども顧みず、子打たれても退かぬ、坂東武者の武者揃い着込みし鎧の草摺や、袖を射向けに傾けて、猪首に被る星胃、中に一と際輝ける、大將軍を見るよりも、鎬矢取つて打ちつがい、射るは名に負ふ鎮西の、八郎爲朝とて、古今無双の弓取なり。互に射るも射らるゝも、是非なきことと云ひながら、父と兄とが敵味方、別れ／＼となり給ひ、何れを勝と白眞弓、引き放たれぬ夜の鶴、子を思ふ暗にあらねども、清和の流れの行く末を、思ひ謀らせ給ひける、深き遠慮のあるにこそ。斯くと思案の爲朝は、矢風に兄を拂はんと、兵と放てる弓勢の、響は御所に鳴り渡り、胃の星の八幡座、ふつ／＼と射切り落しけり。義朝から／＼と打ち笑ひ、八郎の手の中精しからず未だ若い／＼。爲朝クワツと憤り、思ふ仔細の候へば、斯く仕つて候に、只今の御言葉心得ず、御許し被るものならば、胃の只中鎧の胸板、仰せの坪を射らんすと、五人張りの大弓に、十五束の矢をかませ、満月の如く引き絞る。其の矢面に立たんもの、

梵天帝釋魔利支天、阿修羅王と申すとも、防がん術ぞなかりける。主の大事と郎黨が立ちはだかれはこはいかに、一と筋の矢に平家武者、二人射貫いて清盛を、追ひ退けし強弓に、倒るゝ兵者數知れず、保元の軍の瀬を速み、岩にせかるゝ瀧川の、割れても末に名は残る、弓矢の譽ぞ勇々しけれ。

驛の名盡し

明治四十五年六月作

谷の戸出でし鶯の初音の旅や梅田驛、吹田同志が膝並べ、人目うるさき茨木や、茨の垣の高槻も、厭はぬ二人が戀中は、死なねば止まぬ山崎の、天王寺を横に見て何處をさして向日町、京都か稻荷いな山科の、あなたの谷は大谷か、逢阪山の下道を通るも戀の闇路かな。やがて乗り行く馬場大津、石山寺の鐘の音は、空に聞こへて打ち渡す。勢田の長橋夢の間に、消え行く露の置き所、草津もり山もる雨の、降らぬ旅路はやす八幡空のと川の河瀬さへ、急がぬ道の急ぐとは、なき身なれども早や彦根、米原過ぎて醒が井の、さめぬ戀路は長岡の、ながき契を願ひつゝ、色も變らぬ柏原、關ヶ

原の一戦に、天下を取るも、取らるゝも戀の敵に競ふれば、天下は天下の天下じやわいな。誰れが取らふとまゝよまゝ。取られてならぬ戀人と、心垂井の日ねもすに語り續けて大垣の、穂積み重ねし距てなく、人の見る目も麗はしい、岐阜提灯に照らす火の晝は消へつゝ、夜は燃ゆる、鶴飼の舟の木曾川や、繋ぐ縁しの一の宮、神かけ祈りいな澤の、いなとは云はぬ想夫戀、彈くもなか／＼琵琶島の妙なる節となりなりて、昔を忍ぶ四つの緒の、調べにかゝる三瀬川、沈み果てしと傳へ聞く、音に名古屋の町にこそ、二人のものは着にけり。

戀の文覺

大正元年十二月作

凡夫も悟れば佛なり、佛も昔は凡夫にて、吾妻ならぬ人妻に、あやなく思ひかけはしの、危きものぞ戀の道、道ならぬ戀と知りつゝも、迷ふは無理か遠山の、霞かけたる花の山、袈裟の姿のあでやかさ、目も春雨のしみぐと、見染めしよりは戀風の、魔風となりて立ち騒ぐ、遠藤武者盛遠が、踏みも習はぬ戀の道、意馬心猿を繋ぎかね、

戀慕の暗に駆け入りて、日頃武勇の氣も荒く、人を殺して其の妻を、奪はんものと淺ましや、如法闇夜の寢屋の戸に、耳押しあてゝ窺ひける。此に哀れは袈裟御前、父亡きのちは繼母の、手に人となり情ある、夫の家にかしづきて、此の年月の憂き苦勞、忘れ果てしも束の間の、只まぼろしの夢の世や、盛遠殿の横戀慕、腹立たしやと思ひしに、親と親との言ひなづけ、ありしこととは露知らず、他家へ縁付き來りしは、どうした因果の身の上ぞ、之れも前世の約束ごと、いつそ死んで吾が夫へ、操を立て、父上の、約束背きし御詫びには、盛遠殿の手にかゝり、今宵過さぬ妾の覺悟、未來は安穩極樂へ、導き給へ彌陀佛と、觀念の眼打ちつぶり、臥床にこそは就かれけり。時分はよしと盛遠が、抜き足さし足忍びより、手練の早業氷の刃、抜けば玉散る露の身の、儚なきものは命にて、打ちし頭をかき抱き、折しも出づる月影に、すかして見ればこは如何に、夫に替りし貞烈の、袈裟の最後に我も折れて、忽ちさむる無明の夢、さめては残る黒髪を、拂ひ落して盛遠が、名を文覺と改めて、佛の道にぞ入にけり。

長唄越後獅子の替歌 日本志士

昭和四年六月作

日比谷蛙の聲さがしく、議員議員とはやされて、さながらこゝに亡國の、憂き目を招く不埒もの、饒舌るも腹は内閣の、さても不死身のあさましさを、おらが大将をそしるじやないが、わけもわからず政治ごと、總理になつた嬉しさを、一人よがりて御座りけり「亞米利加と締盟條約さま／＼あれど、不戰條約第一條、憲法違反の言の葉を雁の便に届けてこられ、惜しやお國のどこやらか、見透さるゝは慣ひにや、御手々握れば代表さん代表じやないもの人形じやもの、ぐるりぐるりと廻して見ればの、ほいの、雨の亞米利加、降りやまさるさ、やとかけのほい、雨かとな「すいた不戦もすかれぬ文句のほいの、心急き立ち氣はや燃へて、やとかけのほい、保留とな「辛苦苦勞も君の爲め「何んたら愚痴だへ、地位は持たねど日本の志士は、己が心を花と見て、國に咲いたり、咲かせたりその政府にいなこといはれ、困り困らす説き明かす、御座れ話しませうぞ、こん小松の蔭で、松の葉のように、こんこまやかに、こんこまや

かに、彈いて歌ふや志士の曲「向ふ相手のしち面倒、腕節そろへて来るもよしよし、何のその、部室の小口に晝寢して、國の亡ぶる夢を見て候「見渡せば／＼、西も東も亡國の、何れ劣らぬ阿鼻叫喚、寄り来る／＼、沖つ白浪絶へ間なく、逆捲く水の恐ろしや、さらす玉の緒くる／＼と、くる／＼と、いざや捨ようぞ御先き拂ひに。

阿呆陀羅經 獨逸征伐

大正三年九月作

頃は太正寅の三年、夏の半ばに奥匈帝國、太子御夫婦御揃ひなされた御旅行先きにて、塞耳維亞學生、拳銃一發御見舞申せば、二世も變らぬ縁は異なもの、粹なものぢやよ三途の旅へと、旅から旅へ旅立ちなされた、後に残つた老帝陛下の立腹最も、塞耳維亞征伐宣戰御布告、同族最負の露西亞のザールが、捨てゝは置けぬと陸軍動員下した命令、聞くよりドツコイ獨逸のカイゼル、横鎗入れたで、露獨の宣戰佛蘭西すかさず獨逸を挾撃、敵となるのも味方となるのも、國の面目武士の意氣地ぢや、敵を撃つのに遠慮は入らぬが、敵でもない國撃つのは滅法、々々素敵なカイゼルあ好い氣で、近

所は迷惑狂い犬奴に、噛まれちや大變、白耳義助けて公法糺さにや、萬國は暗じやと英國繰り出す、巴爾幹モジ／＼伊太利愚圖々々、獲物は欲しいが手出しは劍呑、日和見順慶二の足踏んでも、一度は立つべし世界の大亂、之れから始まり優勝劣敗腕力づくなら誰れにも負けない、日本男子が高見の見物、向ふの火事よと、見てはペラポー居られるものかい、膠州落して獨逸奴懲らして、世界に見せしめせんけりやならない、サー往けサー往け、膠州なんかを取るのは何んだよ、袋の鼠を捕るより樂だよ、樂なかわりに阿呆多羅經など、唱へて獨逸に引導渡して、往生させろよ。

無い物盡し

大正七年八月十五日作

無い／＼無い／＼無い物盡し、豐年續きに米が無い、無い筈あないがと尋ねて見れば慾の程度に限りが無い。奸商買占め、占め買いするので、御米はあつても、食ふのが無いのぢや。そこでビツクリ農商務省に、警告すれども米價は益々、暴騰々々暴徒は出て来る、焼打ちや初まる。政府の威信もドウチャ内閣、大臣さん達ちや内務も同然

司法も模様も泣々遞信低頭。大藏開かにや文部やなんかで、治りやつかない。恥や外務は言ふては居れない。陸海軍人頼んでドッコイ、劍附鐵砲擔いで廻はせと、撃たない鐵砲突かない銃劍、斬らないサーベル何んにもならない。暴徒は蔓延天下の動亂。初まり／＼勇者はないのか、智恵者は無いのか、無いのぢやすまない、出て来て鎮めろ。サー出ろ／＼木魚を叩いて驅り出せ／＼。

北陽に演舞場新築せられ浪花踊の催されければ

浪花の浦に大船の、頼みある世の影浮ぶ、君が御代こそ萬々歳。

帝徳四海に治きて、民のかまどは大空に、棚引く雲の絶え間なく、出船入船限りなき榮へを祝ふ乙女等が、あかも裾引く舞の手や、奏でかなづる音楽は、天つ神様綿積の神様達ちも諸人と、俱に愛でさせ給ふらん。夫れ舞といつば畏くも、

天照皇太神の、御怒りなだめ奉らんため、八百萬の神々が、神集ひまして、天の岩戸の御前に、歌ひはやして舞ひ給ふ、白目の命の足拍子、トゥ／＼タラリトゥタラ

リ、とんと響けば難有や、光明忽ち輝き渡り、いとも尊き
太神の御姿現はし給ひける。箇様に目出度き古事を、傳へて舞ふぞ大正の、聖の御
代のしるしなりけり。

京の名所

大正九年初夏作

京の名所はおちこちと、寺から神へ舞ひ上り、祇園下加茂上加茂と、だん／＼北野の
天満宮、拍手打つて伏見町、稻荷おろしや愛宕山、天狗倒しのすさまじく、吹くや嵐
の山櫻散りて青葉の夏木立、よいよい／＼で渡月橋、下を流るゝ川水に、寫る姿はア
ラ不思議、妖怪變化と見へつるは、筏に眠る文身の、爺か腕の羅生門。

端歌

寝ざめの床

明治三十九年十二月作

うつゝにて、聞くも嬉しき鶯の、聲にむつくり起よとしたが、未ださめやらぬ主の夢、
さまして聞かそうかどうか、思案の枕そばたてゝ、又も一聲ホーホケキヨ

夕

暮

明治四十一年作

獨り淋しき夕暮に、誰ぞや門邊に音なふは、木枯そつと柴の戸を、叩く落葉の音かいな
思ひ參らせ
明治四十二年四月作
思ひ參らせ思はれて、主の浮氣もやみの夜に、啼かぬ鳥がなかく／＼に、心嬉しく候か
しく

鹿の鳴く音

大正二年十一月作

鹿の鳴く音を垣根にこめて、聞けば身にしむ奥山住居。浮世離れしかひもなく、又ほ
ろ／＼と萩の露、落ちて濡らせる戀衣、エーなんじややら我が心

留めてとまらぬ

大正六年夏作

留めてとまらぬ水道の、栓ない思ひに身を沈め、このまゝみずに流されふか。男心の
恨めしい

何にやらゆかし

大正九年四月一日作

何やらゆかし春雨の、花を催す昨日今日、そゞろ歩きも濡れ燕、軒の古巢に待わぶる

咲くや 櫻

大正九年四月十三日作

咲くや櫻の嵐の山は、霞ばかりを吹きのけさせて、花にさわらぬ枝もなく、散りて浮べる色や香の、流れて早き山水に、消ゆるそはかな怨めしき、エーまかせぬ人の世の中ならば、いつそ散れく散りかゝる、峰の白雪淡くして、櫻に明日はないわいな

金

大正九年四月十五日作

金が無いとて馬鹿にはするな。金は臆病未練もの。見やれ金ゆへ身を果す。金が敵の世の中なれど、地獄の沙汰も金次第。金に任せて閻魔さへ、極樂浄土の奥座敷、歌舞の菩薩を伏し拜む

二人が 中

大正九年四月作

蜜の様なる二人が中は、吸いつ吸はれつ巻煙草。野暮な煙も消え失せて、寝亂れ姿、差し込むものは月計り

雷さんと 夕立

大正十四年八月五日作

雷さんと夕立は、何時も連れ添ふ仲じやぞへ。そりや空言か暗雲に、怒鳴り廻りて落つるやら、涙の雨の大降りに、軒は裏見の瀧の水

嚴島紅葉谷

昭和三年十月作

浦山をめぐりく／＼て宮嶋の、見あかぬ眺め紅葉谷、埋むるばかり集ひ来る、粹も不粹も織姫の、色に迷はぬものはなく、妻戀ふ鹿もいるわいな

梅が 香

昭和五年一月作

梅が香や、隣の花が氣になつて、今朝も聞いたよ鶯の、はほとばかりに口ごもる、エーじれつたい垣根越し

昭和五年三月廿日雨いたく降りければ

涙の様な雨滴の、落つる軒端に濡れ雀、飛び行く空を眺めやる、眼にも宿せる露雫、流れて淵となる河に、戀や住むらむやる瀬なの、人の心をかき亂し、降るは胸うつ雨ばかり

渡る世の中

昭和五年四月作

渡る世の中金ゆへに、泣いて暮すも心から、稼ぐ仕事のあればこそ、辛苦々勞に身はやつれ、破れ洋服破れ靴、とばく歸る朧夜の、月に恥かし我が姿、見付けし犬に吠へられて、情けないやら悔しやら

春の夜

春の夜は、夢さへ遊ぶ山里の、月に嬉しき櫻かも。更けて色ます此の花の、寝亂れ姿しみくと、曉かけて飽きもせで、私しや見とれて居るわいな

夏の夜

夏の夜は、短いものとは夕涼み、風待つ空に月の影、更けゆくまゝに天の川、流るゝ星の二つ三つ、消えてはかなき玉の緒の、行衛戀しき心かも

秋の夜

秋の夜の、永い夢路も戀ゆへに、迷ふ心を白露の、おきてさめたる床の上。音づるも

のは雁の聲。消へ行く空に一時雨、降りかゝるではないかいな

冬の夜

冬の夜に、一人かも寝ん置き炬燵。燃ゆる思の心かも。更けて淋しき寢屋の内、暮る松風聲ばかり、聞く身につらき有明の、月さへ恨んで居るわいな

博多節

數の星様

數の星様光つて御座る。私しや隠れて慧星。たまに出るさへ騒がるゝ

豊臣朝臣

大正二年八月作

豊臣朝臣秀吉公は、世界萬國切り靡け、皇御國の日の本と、アリヤ爲し給はん雄略の、残る浪華の月の影

大正七年十二月十九日中西正樹君の還暦を祝し
宴會を烏森濱の家に催しける折り

曆還して年新玉の、心天下の春景色。飲めや歌へや明日は又た、匂ふ朝日に山櫻

心引かれて

大正十年五月作

心引かれて又た見に行けば、今朝にもまさる夕櫻、木の下蔭を宿として、今宵誰をか主の花

寝たかすねたか

大正十年五月作

寝たかすねたか。思はせぶるか叩く水鶏の音にさへ、浮名立てじと人の耳、近い隣に氣がねする

鴨 緑 江 節

草 履 取

大正九年二月作

草履取り、末は關白太閤殿下。矢はぎの橋に、アラすや／＼と。天下取つたるよ、アラ夢を見るよ。憎くや來る、蜂須賀ゆり起す、チヨイ／＼

深草の少將

同

深草の、少將小町に百夜も愚か。命の限り、アラとぼとぼと、通ふ戀路はよ。アラ厭いなくよ憎くやたゞ、一と夜がまゝならぬ。チヨイ／＼

辨

慶

同

辨慶が、安宅の關に山時鳥。血を吐くばかり、アラさら／＼と。卷物一卷よ。アラ讀み上ぐるよ。憎くや見る富樫の、目のこわさ。チヨイ／＼

忠

と 義

同

忠と義の、道踏みしめて四十と七士。雪の夜中に、アラ静々と。積る怨をよ、アラ晴さんとよ。悪くや吉良、炭小屋に隠れんぼ。チヨイ／＼

仲

國

同

仲國が、嵯峨のあたりに尋ぬる人は、峰の嵐か、アラころりんと、鳴るは鈴虫よ、アラ琴の音かよ。主やもし、局じやないかいな、チヨイ／＼

鎗 立 て、

同

鎗立てゝ、大小たばさみ股立ち取りて、城の御門を、アラ静々と。下に下にとよ、アラ行列はよ憎くや又た、殿様かこの内。チヨイ／＼

西比利亞の 同

西比利亞の、雪も氷も朝日に解けて、烏拉爾おろしか、アレそよ／＼と。花の心によアレして、見たいよ。憎くや又た、西風吹き暴む。チヨイ／＼

日 鮮 一 家 大正十一年二月作

一

天照す、神の御末の御代しろしめす、國は日の本あな尊しや。君が恵によ、韓大和よ。睦み合ひ、隔てはないわいな。チヨイ／＼

二

中つ世に、中は絶へても朝鮮國は、建速そゝる須佐の男の、神の残せしよ、根の國よ。今や又た、昔に立ち歸る。チヨイ／＼

三

血を分けし、兄じや弟世の仇波に、隔てられたる千餘年。再び廻りよ、逢ひ見てはよ、片時も、離るゝ譯はない、チヨイ／＼

四

韓衣、大和錦の光を添へて、いとも妙なる高麗樂の、古き調べによ、乙女等がよ、連れたちて、舞の手はれやかさ。チヨイ／＼

サツトネ節

行きますか 大正二年四月作

行きますか。虎伏す野邊の朝鮮へ、所變れば氣を付けて、氣を付けて、千萬金に換へがたき、身を大切に歸れ君。まつてよ

我れ行かん 同

我れ行かん。鯨潮吹く玄海の、灘を渡り朝鮮へ朝鮮へ、たとへ虎伏す野邊とても、踏

んで歸らむ君がそば。ぶじに

板東勘七の失敗談を聞きて作れる 同

今宵こそ。きつと思ひを遂げんすと、巧みに巧む手だてさへ、く。悔しや何んとせんかたも、振られて歸る果報もの。泣いたね

お疲れか 同

お疲れか。朝のうちからうたゝ寝の、夢に笑顔、憎らしや、く。昨夜のむつ言重ねても、うつゝに聞くか杜鵑。ないたね

喇叭節

靈南坂

大正二年十月作

一

靈南坂の夕嵐。落ちし一と葉に秋ぞ知る。憂國至誠の大丈夫が、止むに止まれぬ血の煙

二

旗は裂かれて日の丸の、墜ちし國威を如何にせん。悲憤の涙留めかねて、注ぐ血汐や地圖の上

屍を積みて

屍を積みて滿洲の、野の末山の奥迄も、染めし血汐の色に又た、光り添ゆべき秋や何時

錆も錆なり

大正二年作

錆もさびなり身から出た、錆に腐れて黒金の、たても防げぬ世の非難。うけて立つ矢の鋭さよ

湖水渡り

弓矢の意地に身をすてゝ、湖水を渡る光俊が、最後の武勇を揚鞭に、振ふ墨繪の陣羽織

一の谷

青葉の笛も矢叫びの、聲より洩るゝ一の谷。落し平家の一門は、須磨の嵐に散りて行く

盛政

鬼と呼ばれし盛政も、身には荒縄縛り首。死出の旅路の装ひに、今を限りと引かれ行く

丑の歳の春長田秋濤より寄せられたる歌

棚から落る牡丹餅を、今日か明日かと胸算も、積る今年で四十三。又もね牛で明くる春

返し歌

大正三年正月作

寝て待つ果報も小車の廻る月日をうしと見し春は來にけり夢の間に重ねし歳の四十年

博多なまり

大正十月作

博多八丁兵衛の御寮さん『アンタクサ、フテガツテ、ドウジャロカイ、ヨカキモン
バ、キトンナザルヤーナー』大竹割つて兵子かいて兵子の錢にや一文でも拂はれん
とたい

同

チンチク殿や谷ワクロウ唐人ナマリの言の葉は、アンニヤン、ピーサン、イカンバイ、
トントン、シヤンシヤンそらヨカタイ

石山寺

大正十三年一月十日作

石山寺の秋の月。光る源氏の物語、文の林に咲き出で、紫式部名は薫る

出雲節

水や空なる

大正二年六月作

水や空なる太平洋の、彼方の岸による浪は、大和島根に打ち返す、返すくも木枯し
に、またも散り行く唐錦。よそに眺めて、コナ旦さん、居られふか

こゝは

大正二年一月作

ここは曾根崎昔も今も、變りやせぬぞへ戀の道

戀の道 同

戀の道には滋石はいらぬ。北と南をコナ旦さん、さして行く

三つ崩し 大和心で 大正三年八月作

大和心で散つたら花よ『鼎錢甘きこと飴の如し』じやないか。どふして命が、チツト

モソツトモ惜まれよふか

主の爲めなら

同

主の爲めなら死んでも見よか『飄零の遊子情何んぞ濃かなる。山紫水明美人に似たり』
じやないか。どふして死なずに、チヨツコラチヨツト居られよふか

飽きも飽かれも

飽きも飽かれもせぬ中なれど『時に利あらず離逝かず離の逝かざる奈何かすべき。虞や
虞や汝をいかにせん』ぢやないか。どふして泣かずにチヨツコラチヨツト居られよふか

ドンく節

月はもとより

大正二年十一月作

月はもとより圓いじやないか。廻るつらさに缺けて行く。よしてお呉れよ闇暗ばかり。
照す光を持ちながら、夜の世界をなんとする。ドンドン

國は小さくて

大正三年五月作

國は小さくて貧乏じやあるが、よそにや負けない大和魂。如何にせつない世が世とな
ろが、君と親とのある限り、世界皆敵なんのその。ドンドン

敵は獨逸か

大正三年作

敵は獨逸かはた英吉利か。ここが思案の支那さため。引けば佛蘭西、露西亞、亞米利
加も、戀の意恨で攻め寄する、日本一人でなんとする。ドンドン

磯 節

大 和 心

大正四年三月作

大和心を人若し問はゞ、櫻植たり軍をしたり、廣い世界も、心任せにするのじやわいな

辨 慶 さん

同

金と力はない色男。辨慶さん程力があらば、取つて投げたい明けの鐘じやと悔しがり

金もいらなきや

大正四年作

金もいらなきや名譽もいらぬ、いらぬ命の置き場に困り、ちよいと投げ出すかんしや

く玉は恐ろしや

風は福岡

大正六年六月作

風は福岡玄海灘の、波も荒津の濱邊の育ち、平野次郎が心づくしは維新の花よ

廣い様でも

大正十年作

廣い様でも世間は狭い、せまい口から傳はる耳の、早い世間にうわさすりやこそ知れるぢやないか

大津繪節

大正三年作

オーイ／＼

オーイ／＼お猿さん、滿洲コツチエよこさんか、おさるはびつくり目をむいて、イエ／＼驚奴にさらわれて、残りは半分ありませぬ、ドレ／＼蚤なと取りましょふ、ヤレ／＼しぶとい畜生奴、うち放し。そんなら蒙古も取つて置く、内と外との分け取りに、虎の威をかる猿の智恵

逢をかよそふか

大正十一年作

逢をかよそふか眞の暗、ぼつり／＼と降る雨に、ぬれていやかや嬉しかろ、迷ひの氣色小夜更けて、寢屋にひらめく稻光り。『アレ人殺し、オ、恐はかつた』。夢の浮世に夢の戀、さめてよいやら悪いやら

カチユウシヤ節

寢んねしなされ

大正九年二月作

寢んねしなされ今こそ寢んね。寢んね寢顔に花も咲く。咲くや櫻のラ、散りやすさ
寢んねしなされ坊やが髪は、松の緑の夏木立。延び行く姿ラ、目に見ゆる
寢んねしなされ紅葉の様な、手にも離さぬ腰刀。抜けば玉散るララ一と雫
寢んねしなされ大事の坊や、吹いてさますなすきま洩る、風も當ればラ、身にしみる
寢んねしなされ坊やはよい子。よい子よい子は逞ましく 皇御國をラ、守りましょふ
寢んねしなされ坊やは可愛い。可愛い坊やは生ひ立ちて、君と親とにラ、盡しましょふ

少女歌劇の歌とてコロツケー／＼と歌ふを聞き其譜
に擬して作れる

大正九年三月廿五日作

自轉車貰ふて乗つたはよいが、毎日々々すつてんころり。昨日は犬をひいてわんと喰ひ付かれ、今日は人にぶつつけ又ころげ。アイタタツタ、アイタタツタ、アライタイお金儲けて嬉しかつたが、持つと心配ドウシテモ心配。死ぬに死なれぬ心配成程わかつた。死なねー薬は金だんべー。アハ、アハ、アラ嬉し

インデアンの歌に擬して作れる 大正三年三月卅日

作る野菜や米や麥を、其日其日の糧として、更らに寄せ來る生計の敵と、日がな夜がなに戦ひ疲れ、我れは老ひたる農夫なり。我れは耕す田野の主よ。我れは老ひたる農夫なり。我は耕す田野の主よ

盆踊の唄

大正十四年八月

つき出す鐘は岸龍山觀音寺。聞こゆるうちに御念佛。佛も御座る盆踊り。さあさ揃ふ

てなんまいだあ

二

よれや集へや盆踊り。踊るとて、今日は閻魔の骨休め。地獄の釜も明け放し。さあさ歌へやなんまいだあ

三

可愛い娘に踊らせて、ほめられて、親は雀躍り盆踊り。村の若衆も總踊り。踊つて歌へやなんまいだあ

梅が枝節

鶯が鳴いたなら、朝寝もせまい窓の雪。若しもほけきよと聞いたならば、その時きや開けよ梅の花

佃斗南氏寺内の農園に來り盆榮に示されたる

俱知節

大正十二年

お前の喉とわしが腕、ともに寶の持ちぐされ。都はなれし田舎の住居、膝を枕に暮の鐘

之に和して作れる 大正十二年

鬼をも挫くわしが腕。何時しか鈍る老の阪。玉をころがす女房の喉も、さびて聞ゆる暮の鐘

獄中 作 わしが愚痴 大正十四年五月

愚痴な様だが聞いてくれ。三十餘年國のため、心盡しの益良雄に、なんで政府が意地悪るな、政府の胸とわしが胸、合はぬ普選の政見に、思ひもよらぬ陷し穴、落て無念や生地獄

山中節

寺内の農園附近に毎日銃獵家の來りければ

銃砲かついで獵犬つれて、何にをとりやら撃つのやら。

犬骨折らせて鳥追ひなさる、生きた案山子の間の惡さ

一ツトセー節

大正十年三月十九日作

一ツトセー、廣い世界に不合理なく、政治喜ぶものはない、トコトンマデ、ヤツ

ツケロ

二ツトセー、不正事件は山程も、起る社會を改造せ、改造せ、トコトンマデ、

ヤツツケロ

三ツトセー、皆んな心を一つ玉、こめて打ち出せ國の爲、國の爲、トコトンマ

デ、ヤツツケロ

四ツトセー、世にも不思議な事ばかり、人よりお金を大事がる、大事がる、ト

コトンマデ、ヤツツケロ

五ツトセー、いづれ鷺やら烏やら、わからぬ同志がいがみやい、トコトン

マデ、ヤツツケロ

六ツトセー、無理な法律づくめでは、監獄ばかり大繁昌、トコトンマデヤ

ツツケロ

七ツトセー、なんば文明開化でも、食はずに生きてはいられない、く、ト

コトシマデ、ヤツツケロ

ハツトセー、やむにやまれぬ大和魂／＼、奮ひ起こして、戦はん／＼、トコトシマ
デ、ヤツツケロ

九ツトセー、こふなるからは血の雨の／＼、降りて堅る外はない／＼、トコトシマ
デ、ヤツツケロ

十トセー、とふ／＼維新の花を見て／＼、皇御國は萬々歳／＼、バンザイ

ヨサコイ節

旅行するなら、飛行機野宿、汽車やホテルは殺さるゝ。トコトシマナ、コトバカリ
砂利や、満鐵食ふのは愚か、人の生き血を吸ひたがる。トコトシマナ、コトバカリ
瓦斯や、阿片でふくるゝ腹は、モツソ御飯で瘦せ果てる。トコトシマナ、コトバカリ
税は殖へても、儲けは殖へず、子寶ばかりが殖へたがる、トコトシマナ、コトバカリ
浮いた骸に、下手人もあがる、浮ばないのは首ばかり。トコトシマナ、コトバカリ

咲いた櫻に、吹き来る嵐、人の氣さへも散りたがる。トコトシマナ、コトバカリ

サノサ節

夏 草 や

大正四年十月

夏草や、武夫どもの夢の跡。そよぐ秋風身にしてみて、泣くも悲しき虫の聲

昭和三年嚴島に遊び

嚴島、鏡が池の曇りなき、神の光を四方の海、照す燈籠も有の浦、御笠の濱に影うつ
る

同 嚴島紅葉谷岩惣旅館にて

紅葉谷、鹿の鳴く音をよそにして、さゝやぐ水のほとりには、いともゆかしき爪弾の
粹な浮世の三下り

同 片田亮なる人已れの歌をと乞ひければ

聞けばかたゞも柔かな、心つくしに生ひ立ちて、玄海灘の汐風に、吹かれて黒き色男

有明節

三か月の頃より

大正五年四月廿九日作

三か月の、頃より待ちしまんまるな、月も満つれば、片割れの、つきぬ名残りを杜鵑、啼いて暗路に立ち歸る

さみだるゝ

大正六年六月十九日

さみだるゝ、空に一と聲時鳥。鳴くも嬉しき旅枕。うつゝに聞くか布團着て、寝たる姿の東山

わしが國さ

大正六年十一月作

わしが國さで見せたいものは、昔しや楠木今ま乃木坂の、ゆかしなつかし大將邸、いつも櫻の花盛り

降れよ降れ

大正九年三月廿五日作

降れよ降れ／＼降る亞米利加の、雲は漂ふ太平洋。怒濤を凌ぐ扁舟に、ひらめくもの

は日章旗。ほんに四海は同胞と、思ひながらも吹き暴るゝ。先に唱へし正義の道は、何處に棄てたかウキルソ

阿前とならば

大正四年八月十一日作

阿前とならば手を引いて、高遠の理想は法螺でも喇叭でも、ドコイトヤせぬカマヤセぬ

法螺でも喇叭でもまだ愚か、伴食の椅子ならベンチでも、腰かけてドコいとヤせぬカマヤセぬ

椅子ならベンチでも腰かけて、御大禮公侯伯子や男爵に、ドコなるまではやめはせぬ

僕が胸より

大正十一年九月作

僕が胸より燃へ出づる、焔火の様な熱情も、君冷やかにとけはせず。夏尙ほ寒き氷室

宇治の

宇治の川霧立つ瀬も早く、ゆられながらに下る船

二人居てさへ

二人居てさへ淋しきものを、まして一人の夕がすみ

尼港の惨事

雪は解けても怨は消へぬ、なぶり殺しの血の涙

風が怒れば

風が怒れば船頭衆が騒ぐ、さわぐ頭を叩く雨

野には七草

野には七草空には月の、澄めど淋しき虫の聲

戀に破れて

戀に破れて雲井に洩す、聲が悲しき時鳥

獄中作

永の牢舎に身は慣るれども、心ばかりはすみかぬる

わしが道樂

わしが道樂人若し問はゞ、心天下の外にない

君と語らん

君と語らん天下の大事、聞けよ雲井の杜鵑

寝てもさめても

寝てもさめても憂はつきぬ。とても浮世の夢ながら

臀に火ともす

臀に火ともす螢が居れば、爪に火ともす人もある

戀

螢の光りに見初めし戀は、袖につゝめど身をこがす

蛙

心亂れて目もさみだるゝ、暗に哀れや鳴く蛙

闇の世の中

大正十四年七月

闇の世の中提灯つけて、あるきや消さるゝ大暴風

寝るに家なく

大正十四年十月八日

寝るに家なく野宿をすれば、天に聲ありちよいと來い

食ふに職なく

同

食ふに職なく徘徊すれば、無理に捕へて籠の鳥

噛み付くかんけん

同

噛み付くかんけん噛まるゝ野犬、どちが勝つやら負けるやら

大正十五年五十三歳の春を迎へ

五十三つぎよゝゝ來たが、鞋じやぬがれぬ京名所

思ひ太刀紐

思ひ太刀紐しつかとしまして、抜けば輝く大和魂

人は法螺吹き

人は法螺吹き蟹にや泡を吹く、吹いて飛ばせやつむじ風

まこと内閣

大正十五年一月十二日

まこと内閣うそつきや總理、偽證なんかはへのへのへ

寒いゝと

同 四月六日

寒いゝとつぼんで居たが、今日は櫻の雪景色

濁る世間

濁る世間に住み慣れそめて、清き河水人汲ます

お前や天狗猿

大正三年十一月廿日

お前や天狗猿わしや冬枯れの、木葉天狗で舞ひ廻る

いびき高島

いびき高島夢路を漕いで、歸る寢ざめの波の音

暑 い く と

暑 い く と 諸肌ぬいで、なんの遠慮も煽風器

遠 く 元 寇

昭和二年五月作

遠く元寇近くは露艦、波に沈めた沖の島

ホツチョセー節とて唄へるを聞き其の調に擬して作れる

忍ぶ戀かや逢ふても丸い、心望月たゞ一と夜

木の根岩角踏みわけ行こよ、こひとなりやこそ闇夜でも

昭和四年十月十七日林重俊氏の三男俊彦君藤林家の養嗣子となり披露宴を開かれ其の席上にて作れる

藤の林か林の藤か、持ちつ持たれつ、花は咲く

同十一月十五日頭山翁等と伯州三朝温泉に一泊し忙がしさに

面白いぞへ三朝の御湯で、よさゝエツサ、で飯を食ふ

同十一月十九日松江市松崎水亭に於て大本教徒

より大歓迎を受け席上にて

笛や太鼓に三味線引いて、謠ふ信徒の神遊び

海 邊 巖

大和島根の巖の下に、よせて咲かする浪の花

清き濱邊の千引の巖、引くか浪風沙の音

緊縮の歳暮

晦日の鬼奴が来ようと言ふよ、私一人の暮れじやない

昭和五年元日に

人間五十の元とり越して、儲け七つの年の春

午 の 歳

午の歳でも伯樂が居らぬ。ドーセ天下は馬鹿騒ぎ

時が来たなら

時が来たなら枯木も咲こよ。急がしやんすな冬木立

湯河原温泉にて

近い湯河原皆さん御出で。命百まで保證する

金は湯水と使はしやせぬぞ。命ながけりやいる寶

同所瀧の名四つ読み込み

行けよ千人不動の瀧は、ほんに清瀧達磨瀧

同所川の名三つ読み込み

心清瀧清瀧の流れ、落合ひからんだ藤木川

一番鶏

人がさめなけや一番鶏も、世間さわがせ鳴くばかり

友人より炭坑の歌を乞はれ作れるものゝ内

ちらと見染めて坑内下り、戀の闇路を掘り起す

逢ふ瀬かたばん待夜はふけに、戀の重荷を投げおろし

昭和五年六月十三日 印刷
昭和五年六月十五日 發行

非賣品

著者 東京市赤坂區新町五ノ七番地

著者 内田良平

發行者 東京市麹町區永田町二ノ八六番地

發行者 知野秀次

印刷者 東京市芝區田村町五十一番地

印刷者 福井安久太

東京市麹町區永田町二丁目八十六番地

發行所

黑龍會出版部

電話銀座九七一番
振替口座東京一三七九九番

終